

第一章 娘との約束

最初におこった感情は焦燥だった。次いで、勝手に部屋をあさられた怒りと、なぜ分かったのかという疑問に襲われた。

悠里（ゆうり）の前にはいま、アダルトビデオと雑誌が花札のように並べられている。自室タンスの、二重底の箱に隠していたものだ。

男なら、エッチなおカズの一つや二つ、持っていてもおかしくない。問題は中身と、それらを見つけた人間だ。発見者は瀬波遥香（せなみはるか）、悠里の実の娘である。

「パパ、こういう趣味があったんだ。やだ、気持ち悪い」

遥香はツインにした黒髪を揺らし、母親似の顔をゆがめる。これみよがしな手振りで、雑誌の一つをつまんだ。こぼした牛乳をふいた雑巾を持つようなやり方だ。

（オレの宝物を……）

悠里は憤りを感じたが、雑誌の表紙を見て我に返る。映っているのは、胸が平らで、あちこちが未発達な少女たちだ。年は遥香より下だろう。

此処にならぶ「オカズ」はすべて、そうした少女たちが主体となっている。非法な手段で入手したものも多い。

所持が明るみに出たあとの未来が、脳裏に駆け足でめぐる。離婚、失職。実家からも爪弾きにされるだろう。再就職しようにも、まともな職業にはきつとつけない。路頭に迷うかもしれない。

「遥香、頼む。ママには内緒にしてくれ」

床に正座をし、背中を丸めて頭を下げる。ガキのように見えるだろう、と思った。自分の体格を……痩せ型で上背がない……。悠里はよく把握していた。なかでも身長は致命的だ。いまは娘より身長が低く、妻を除けば、誰からも（物理的に）見下されがちだ。座ればそれに拍車がかかる。

父親として、男として、こんな情けない姿は娘の前にさらしたくなかった。だが、場を取りつくろうことが今は先だ。

「頼む！ それはすべて処分するから！」

必死の声で娘に頼むも、遥香は唇をとがらせ「えー」と答える。仕草のせいかわ、遥香は実年齢よりも年下に……。雑誌の少女たちと同じくらいの年頃に見えた。

彼女は無言で雑誌を離れた。A4サイズのそれは背表紙を下にして落ち、売春婦が客の前でするように、足、もといページをだらしなく開いた。

一面に映っていたのは、無修正の性行為写真だった。紙の端がすこしシワになっている。過去、濡れた手で触ったことを示している。

「パパってこのくらいの子が好みなんだね。もしかして、私のこともいやらしい目で」

「見てない！ それはない。絶対にない」

これは本当だ。遥香のことは可愛いと思っていたが、性的欲望は抱いていない。

そのことを、悠里はせつせつと訴えた。遥香は黙って聞いていたが、

「……そんな当然のことを、長々説明するってどうなの？」

と、絶対零度の声で言ってきた。ぐうの音も出ない。

「お願いだ」

悠里はふたたび、情けなく懇願に走る。

「どうか秘密にしてくれ。ママに見つかったら、離婚することになってしまう。仕事もなくなる」
「そっかー。それは大変だね」

深く感じ入った表情で遥香は頷く。分かってくれたか、と悠里はほっとした。だが、安堵（あんど）はつかの間だった。

「私、こんなで楽しんでる変態なパパ、いらない」

ナイフをぶっ刺すような一言を、遥香は残酷に吐いた。

「離婚してくれた方がいいな。私、ママについていく。パパとはこれっきりね」

「おま……何て？」

「だから、いらない」

何度も言わせないでよ、と遥香は鋭く放つ。

頬の筋肉が勝手に動き、悠里は、辞書にのるような引きつり顔を浮かべてしまう。

（オレを気持ち悪く思うのは理解する。だが「いらない」はさすがに言いすぎだろ）

しかし文句は出せなかった。かろうじて口をついたのは「どうして」というありきたりな疑問だ。

「だって気持ち悪いんだもん」

ひねりのない質問に対し、遥香は通りいっぺんの言葉を吐き捨てる。

「パパは適当に野垂れ死んでよ」

「お前……いくらなんでも、言っていないことと悪いことがあるだろう」

「こんなので遊んでる奴が説教？ ふざけないでよね」

乱暴な音とともに、アダルト物の整列が乱雑さを増した。遥香が蹴ったのだ。こいつ、と思っ

たが言い返す言葉はない。悠里は黙って唇を噛みしめた。

怒りに恥に情けなさ、様々なマイナス感情がなймаぜとなり、気がつけば涙を流していた。

「あはっ。先生に叱られたみたいいな顔だ」

「ぐ……」

腕で「し」と顔をこすった。一度はおさまるも、悲憤の雫はまたにじみ出る。

（大人だぞ、オレは）

しかし悲しいかな、遥香がそう表現する気持ちは分かった。悠里は、自他ともに認める女顔なのだ。正座でべそをかけば、大人の威厳はすっかり消し飛ぶ。

「なあ、頼むよ」

情けないのは重々承知で、再三、遥香に頭を下げる。

「オレにできることなら何でもする。お前の言うことはすべて聞く。だから、どうか見逃してくれ」

精一杯、低姿勢に出たつもりだ。だが我ながら、まだ少し高慢さが残っていた。涙の反作用で、親としてのプライドが鎌首をもたげるのだ。

（未だにオレは、頭を下げきれないのか）

悠里はひそかに自嘲する。

（自尊心をつくらっている場合じゃない）

事態を収集できるなら、プライドなんて消し飛ばそう。決意し、土下座をしようと腕を動かす。だが遥香は、とんでもない言葉を……斜め上方向の思考からきたと思えるセリフを放った。

「もっと可愛く言って」

「え？」

「早く。何でも言うこと聞くて言ったじゃん」

遥香はじれったそうに足を軽く踏み鳴らす。

「女の子っぽく言ってよ」

悠里の頭には「？」が無数浮かんだ。なぜそんな事を強いるのだろう、と。

（大人の男に、女の真似をしって言われても）

心の中に苦さが広がる。女性の口真似なんてしたくない。しかし、遥香の機嫌をこれ以上、損ねられない。

一人称を「私」に変え、丁寧語で言い直した。しかし遥香は、その途中に「堅苦しい」と、ダメ押しの言葉をかぶせた。

「堅苦しすぎ。私くらいの年の子が、友達に話すように言ってよ」

「わ、分かった。もう一度、言い直すから」

慌てて宣言すると、遥香は「うんうん」と、上機嫌に聞こえるトーンで二つ返事をした。

「ちゃんと言えたら、ママにこのことは内緒にしてあげる。それに、パパのことも嫌わない。お友達として見てあげる」

彼女は表情筋を邪悪に操って笑みを作った。

言葉ひとつで「いない存在」から「友達」になるとは、相当な格上げである。悠里は驕りを感じたが、追求はしなかった。

「わ……私に出来ることなら何でもするよ。あなたの言うことはぜんぶ聞く。だから、見逃して。お願い」

最近では、男女の言葉つかいの差が昔ほど強くない。若い人間は特にそうだ。それでも悠里は気恥ずかしさを覚えた。自分が、遥香と同じ年頃の女性になったように感じる。

「……ま、そんなもんでいいか」

ようやく遥香は満足を見せる。悠里は肩の力を抜いた。だが直後「これで終わりじゃないよ」とささやかれる。

「友達には友達の接し方があるでしょ。だからそれを、明日からパパにやってあげる。楽しみにしててね」

「あ？ ああ」

意外性を覚えつつ、悠里は遥香をかわいいと思った。遊んでほしいと言われるなんて、何年ぶりだろう。

このときは、そう思った。

「いや、おかしいだろ、それは！」

遥香の前で、悠里はあからさまに声を荒げた。

今は夜。悠里は会社から帰宅したばかりで、まだ着替えてすらいなかった。手を洗って軽く口をすすいだだけ。着ていたスーツは、ジャケットしかまだ脱いでない。そんな中、部屋にやってきた彼女に「裸になって」と言われた。

親子の間だから、脱ぐのはまあいい。問題はその後だ。

「足コキさせてよ。パパ、こっこの好きなんでしょ？ 雑誌、いくつか切り抜いてあったもん」

「見たのか！」

悠里は詰問の口調になったが、遥香は悪びれず頷く。

「パパがどんな興味を持っているのか、詳しく知れたかったんだ。友達の趣味を知るのは、基本中の基本でしょ？」

詭弁はよせ、と思った。そんなもの見るな……と言いたかったが、元は自分の持ち物である。唇を噛みしめてうつむいた。

（だからあの後、よこせって言ったのか）

長年大切に保管してきた「オカズ」は、昨日の友達宣言のあと、すべて「提出」させられていた。驚いたことに彼女は、別の場所に隠していた物品も把握していた。

色々な意味で、悠里はそれらを遥香に渡したくなかった。だが暴かれて観念し、彼女に渡した。その代わりもらったのは、遥香の友達の写真だ。人懐こそうな顔立ちと、ぱつんと切った前髪が特徴的だった。太ってはいないが、体つきがむちっとしており、育ちかけの印象がある。悠里の性癖にあう子である。普段ならムラムラしただろう。だが。

『この子で又いてもいいよ』

と、実の娘から言われてしまい、オカズにする気にならなかった。

（写真を渡すことといい、これといい、友達をなんだと思っているんだ）

義憤をわずらいつつ、悠里は、遥香の欲求に拒否をした。

「じゃあ、昨日のことをママにバラしていいの？」

「それは困る！」

「でしょ。ほら早く、裸になって」

急かされ、悠里はしぶしぶ服を脱いだ。気がまったく進まないまま、下半身を丸出しにする。上半身は、意地でそのままにしていた。

男根は萎えていた。陰茎が仕方なさそうにぶら下がっている。
（そりやそうだよな、娘が相手じゃ……）

恥ずかしい格好をさらしつつも、悠里は心の隅で、優越感に似た感情を抱いていた。遥香がどこで「足コキ」という行為を知ったのかは不明だが、勃起していなければ犯しようがない。踏むのが関の山だろう。

股間は男の急所だ。足の下敷きは辞退したい。が、シコシコされるよりずっとマシだ。何しろ相手は実の娘だ。

「足を開いて。床に座って」

やけくそで、言われたとおりの姿勢をとった。

遥香は机の傍にあった椅子を出し、着席して靴下を脱いだ。少女の、うら若く白い足が目前にある。悠里は、自分が生唾を飲んだことに気がついてハッとした。

（相手は遥香だ。オレの娘だぞ）

ふざけるな、と自身に叱咤をかける。股間に、わずかながら熱を感じたことは、知らないフリをした。

遥香の足が、ペニスにびたりとくっついた。温かくて健康的なハリがある。柔らかいが、内在する筋肉と腱のために、適度な硬さを保っていた。

遥香は左右の足を、巧みに互い違いに動かす。元氣のない男根をくにくにと泳がす……初めてとは思えないさばき方だ。

（経験済みか？ まさか遥香、援助交際をしているんじゃないだろうな）

追求したい気持ちに駆られた。が、正直に答えてくれるかどうか。

（くっ、うますぎる！ まずい。これじゃ勃起する）

転がされ、挟まれ、あるいはひねられる。彼女の無作法な足技のせいで、意思とは無関係に、血流が陰茎にどんどん流れる。

（オレは娘に性欲なんて感じない。……確かに、この年齢の少女は好みだ。だが、それとこれとは話が別で……んッ。クソッ！）

耐える意思とは逆に、ペニスは黙的な欲望に流されて膨らむ。悠里は、己の分別心が娘の足に潰されるさまを目の当たりにした。人生で一度も味わったことのない、屈辱的な興奮だ。それが妙にしつくりきた。強いられる状況なのに、おしきせを感じない。

「はっ……はあ、はあ……あ、んっ」

いけないと思いつつ、やみがたい欲望に息があがる。先走りを漏らし、彼女の足を汚してしまった。

ベトベトすると、遥香は笑った。悠里は無言を貫き、身じろぎさえしなかったが、内心では土下座で謝罪した。勃起も、いやらしい液を漏らすことも、遥香が相手ではすべて背徳だ。

「良かったね、パパ」

悠里の苦しい見をよそに、遥香は面白そうに言う。

「私みたいな年頃の子に、足でおちんちんシコシコしてもらえるなんて。普通はかなりの大枚はたかきや無理でしょ？」

そのとおりだ、と思つて悠里は頷いた。直後あわてて顔を上げる。

（これじゃまるで、遥香に足コキされたかったみたいじゃないか！）

違うんだ、と叫ぼうとした。開けた口から、バカみたいなうわごとが落ちた。まともな思考は、遥香が与えてくれる快楽の前に霧散する。

「足、こんなに濡れちゃった」

不意に「くちゅっ」と音があがった。亀頭からの淫らな汗を受け、彼女の足は、なまめかしく濡れている。

うら若い少女の足が、男の汁で汚れている……射精の衝動がわきおこり、悠里は、嬌声を必死にしめだした。

「もうイきそでしょ？ おちんちん、パンツパンに張ってるもん」

「くっ……」

全身に鳥肌が立った。歯を食いしばっても吐息がこぼれる。いつ達してもおかしくない。だが、娘にいじられて精を垂らすなんて許されない。父性の欠片が堰となる。それを壊すように、遥香が言った。

「私とパパは『友達』なんだよ」

射精間近にまで引き上げられた興奮の中、彼女の言葉は、悠里の脳みその表面をなでた。

「友達だから、辛いことは分けあつていいんだよ。ほら、我慢しないで吐き出して」

左右の足で悠里のペニスを挟んだまま、彼女は指先を器用に動かす。尿道を広げられた。精液の通り道が、女性器のように「くばあ」と口をあける。淫猥な気持ち良さのなかに、下着なしでズボンをはいた時のような、心もとなないスースー感が混じった。

「私、これからはパパを『ゆり』って呼ぶね。今が『ゆうり』だから『ゆり』だよ。可愛いでしょ？」

ゆり、なんて、女の子みたいなあだ名だ。だがそれを言及する余裕は悠里にない。愛撫におぼれ、下劣な声とひきかえに、娘の足に精液をぶっかけそうになっているだけ。

「……ッああ！ はッ、はあ……はあ」

すんでのところで踏みとどまった。皮肉にもそれは、遥香のおかげだった。彼女は突然、足を止めたのだ。

「ゆりばかり楽しんじゃって、ずるい。私にもエッチしてよ」

そう言つて、遥香は服を脱ぎ始めた。上は着たまま、下だけ裸となる。悠里と同じ格好だ。

「おそろいだね」

彼女はそう言つたあと「ベッドに仰向けになつて」と言つた。悠里は何も考えず、操られたようにマットレスに体を預けた。

遥香の体が、顔の上に降ってきた。あ、と思つたときはすでに、彼女のお尻と、こちらの顔がくっついていて。ピンク色の、若く初々しい陰唇とキスしてしまう。

「ゆり。私のココ、舐めて」

「むう？ んっ……うっう」

拒絶しようにも、太腿で顔をぎゅつと挟まれ、動けない。しっとりとした重みで、首から上が熱い。

視界一面に、少女の体が迫っている。わずかに毛が生えているだけの白い陰部、傷ひとつない滑らかな腹。性欲がつのつた状態では「目の毒」と言わざるをえない。麻薬並に魅力的で危険だ。

悠里は慌てて意識を変えた。相手は娘だと己に言い聞かせ、自制する。同時に、遥香と過ごした日々を思い出した。

昔は、娘とよく風呂に入っていた。髪を洗い背中を流し、一緒に湯船に浸かった。そんな彼女も思春期をむかえ、ここ数年は一度も入っていない。遥香の裸を見ることなんて、もう二度とないと思つていた。寂しさこそ感じたものの、娘を性的なオカズにする気はなかったから、それでいいと思つていた。

（あんなに小さかつたのに。すっかり大きくなった）

月並みだが普通の事実で、荒ぶる性欲をおさえつける。だがやはり、状況が状況だ。感慨にひたることは難しい。

顔にまとわりつく甘い臭気に、下劣な欲望が肥大化する。射精しそこねた不満が加わり、性欲が、発散を求めてなりたてる。

（女の子の、汗と、オシッコと……むわっとまとわりついて、オレの中の『男』をひっぱり出してくる。相手は……この子は、オレの娘なのに！）

勃起はまったく止まらない。悠里は心の中で、妻である菜（しおり）に何度も謝罪した。彼女はいま、夜勤で出かけている。夫と娘がこんな破廉恥をしているなんて、夢にも思っていないだろう。

「舐めて。舌を動かして。ちゃんと私をイかせてよ。童貞じゃないんだから、やり方は何となく分かるでしょ？」

挿入のあとに「できなきや昨日のアレをバラすよ」と、定型の脅しが続く。それだけは絶対にダメだ。やむなく悠里は、娘へ奉仕を始めた。

まずは膣。舌先で優しくこすったあと、出し入れを繰り返して内壁を卑猥にマッサージする。次いでアナル。本来は出すための穴に舌を差し込むと、ぎゅんっと引っ張られた。舌を根本から抜かれそうになる。わずかにズキッと痛みが走った。悠里はそれを陶然と受けた。

娘に口淫をほどこすなんて、普通なら、拷問並の精神的苦痛がある。しかし悠里は、愉悦をまじえて行なった。もっと吸われたい、顔面を踏まれたいとすら思った。

気がつくと、彼女の尻をかい抱いて、自ら犯しにいつていた。そんな自分を最低だとののしった。

（オレは何をやっているんだ。どうして、娘に、乗り気でクンニするんだ！）

苦しかった。これなら、見ず知らずの男に奉仕するほうがよほどマシだ。そう思いつつ、娘の二穴を、何度も舌と唇で触診する。遥香は甘い声をあげ、潤滑用のエキスを垂らし始めた。にじみ出てくるそれを、悠里は意識的にすすった。

理性と本能の狭い空間で揺れながら、彼女の愛液について考える。濡れているということは、男根を受ける用意ができたということだ。受精に直結する行為を予感し、男根がいつそう激しく鎌首をもたげた。

イきたい。だがイってはダメだ。もどかしくてイライラする。欲求不満で舌の動きが荒ぶり、遥香をさらに喜ばせた。

「んっ！ うああっ、やば……イきそうっ。んううっ、はあ、はあっ」

顔に生暖かい汁がかかった。海辺の風に生のワカメを混ぜたような、生々しいアダルト臭に鼻腔を犯される。遥香が達したことが分かった。悠里は舌をできる限り伸ばし、成長の余地のあるワレメやクリトリス、アナルまでしっかりと舐めつくした。愛液を唾液に置換しながら「彼女が達したなら、自分もイきたい」と思った。

奉仕と自慰の併行を考える。右手が勝手に股間に伸びた。だがそこで、遥香が立ち上がった。首から上を抑えていた重さが消えた。顔に新鮮な空気があたる。我に返って、悠里は手を止めた。セルフの快感を求めた腕が、中途半端な位置で止まった。

「今日はこれくらいにしておこうか」

悠里の手をチラッと見やって遥香は言う。

「私、満足した。ゆりもそうでしょ？」

「え……い、いや」

まだオレはイってない！　そう心の中で絶叫する。

「遥香！」

何も考えず、自分から離れようとする彼女を呼び止めた。

「最後までやらせてくれ。セックス！　セックスさせ……ッ？」

悠里は途中で唇を強く噛みしめた。

（オレ、今何を言った？　セックスって……む、娘と？）

嫌な動悸を感じた。だが、一度口から出した言葉は戻せない。悠里は今まさに、娘に性行為をねだったのだ。

「違う。今のは冗談だ」

我ながら下手な言いわけだと思った。こんな冗談があつてたまるか。

「い、今のはその……菜と間違えたんだ。お前とセックスなんて、頼まれてもするものか」

遥香はふんと鼻を鳴らした。

「それはそれで、私に対してめちゃくちゃ失礼だよ」

少し腹をたてているようだ。

「悪い。でも、本当なんだ！　ママと……間違えて……」

悠里は唇を噛んだ。どの角度から見ても、遥香は、妻である菜に似ている。しかも、好みピッタリな年齢だ。今までは「父親である」事実にとッパをかけられていたが、足コキされて勃起という、一線をこえた所業に染まったことで、それが消えた。

「本番なんて許すわけないでしょ」

悠里にくらべ、はるかに分別のある態度を彼女は見せる。

「私が誰か分かってる？　バ・バ？」

ずっと「ゆり」と呼んでいたのに、ここにきて遥香は急に「ババ」と呼んだ。「親子」という、決して消えない事実を悠里は改めて思い知る。

「私とセックスしようなんて、バカもいいとこだよ。そもそも、コンドーム持ってるの？」

「えっと」

寝室にある。が、これを言っていないものか。

「ないのにやろうとしたの？　変態の考えってマジでクズだね。娘に中出しセックスしようなんて最ッ低。私が孕んじやってもいいわけ？」

自分が気持ちよくなることしか考えてないでしょ、と笑われる。

「考えてないって！」

声は不自然に上ずり、説得力とは反対方向に向かった。遥香に笑いを重ねられた。

「どうしても我慢できないなら、オナニーして発散してよ。そのために、一枚だけオカズをあげたでしょ。ほら、和奏（わかな）ちゃんの写真。あれ見ながら、ティッシュでおちんちん抑えてれば？」

遥香は服をさっと整え、じゃーねと言って出ていった。残された悠里は、下半身を丸出しにしたまま、遥香が放った名前を頭の中でリピートしていた。

瀬波家は共働きのため、食事の用意は一週間おきに夫婦交代で担っている。今週は菜の担当だ。遥香は自室に食事を運び込んで食べていたので、悠里はリビングで、一人寂しく食事を終えた。足コキをされた後だったので、かえって気楽で良かった。

入浴し、歯をみがき、明日の準備も整えた。このあと、普段はゲームか読書をし、十二時すぎから床につく。だが今日は、何をやっても集中できない。くすぶる性欲の火が邪魔し続ける。だが自慰はしたくない。意地だ。

少し早いのが、布団をかぶって寝ようと思った。しかし、ベッドに腰かけたところで、ドアをノックされた。返事をする前に、遥香が姿を現した。両手を後ろに回している。何か隠し持っているようだ。

「我慢しないで発散しちゃえばいいのに。ストレスは体に毒だよ？」

彼女の言に、何のことかと、顔を強張らせながら悠里は尋ねた。すると股間を指された。完全な勃起はしていないが、ほんのわずかに膨らみがある。些細な刺激で、すぐ硬直するだろう。

あのあと、遥香と顔を突きあわせたのは一度だけだ。風呂に入るまえ、廊下ですれ違った。会話はなく、目も合わせなかった。自慰していないことを、なぜ彼女が知っているのか。

悠里はとっさに部屋を見渡した。監視カメラの存在を勘づいた。

「別に何もかけてないよ」

心を読んだように遥香が言う。

「そんな気がしただけ」

悠里は絶句した。これが女のカンというやつなのか。鋭い。だが同じ女性でも、菜はここまで鋭くない。

「ママが帰ってくる前に、すっきりしようか」

そう言って彼女は右手だけを背中から出した。なんとパイプを持っていた。少女の粘膜のようなピンク色をしており、無数の凸凹で彩られている。

「おま……そんなもの、どこで手に入れた？」

「友達に借りた」

あっけらかんと答えが返ってくる。悠里は娘の品行を心配した。だが一番気になるのは、なぜそれを此処で出したのかだ。

彼女が足を開き、挿れてとおねだりする姿勢を想像してしまった。股間がぐんと盛りあがる。今まで、遥香で勃起したことなどなかったのに……足コキからこっち、体が変わる。

悟られまいと歯を食いしばる。それをよそに、遥香はパイプを起動させた。虫の羽ばたきを大きくしたようなビブラートが響き、振動による残像で凹凸が増えて見える。

「男の人でも、お尻になら挿れられるよね？ 試させてよ」

そう言う彼女に、悠里はえくぼを引きつけた。

展開は早かった。

「んっ、あ……はあ、はひい、おおあッ、あっ、ああああ！」

ベッドの上。悠里はあえぎながら、四つんばいで尻をグンツと突き出した。裸ではなくランジエリー姿だ。透け感のあるブラジャーにガーターベルト。もともとは葉の持ち物だ。遥香が左手に持ってきたのだ。

こんな格好でこの姿勢……顔から火が出る羞恥だ。それをえぐるように、パイプがぐりぐりと入ってくる。滑りは良く、挿入はきわめて順調だ。潤滑油を塗ってもらったおかげである。油といても、アナルの専用品ではない。葉が洗顔後に使う白い乳液だ。

「ひぎいっ！ おあっ、痛……お、おおお。はあっ、ああっ」

パイプの直径は尻穴より大きい。しかも悠里は処女だった。挿入された瞬間から今まで、何度も「裂ける！」と思った。だが腸壁は意外と柔軟で、ゆっくりと確実に受け入れている。

内臓が押され、体の奥から、肉体がおかしく変わるのが分かった。

「案外入るものだね。もしかしてゆり、経験済み？」

「してなひっ！ そんなやつ、やらひいコトなんて……んぐういっ」

叫ぶ途中で喘んでしまい、思いがけず舌つ足らずになる。だがそれを気にするより、アナルを押される刺激が勝る。押し出されるように、亀頭から雫が垂れていた。

非処女の疑いを否定しなければいけない。しかしともに喋れない。浅ましい声を連ねるだけだ。

「なんてね、冗談だよ。縦割れてないし、キツキツだし、ゆりは未経験者だね。でもこの調子なら、すぐにガバガバのゆるマンになりそう」

彼女はまた、こうも付け足した。女の子として生きていく方がいいんじゃないか、と。

「女性用の下着、似合ってるよ。ゆりは女顔だし、体も細いからしっくりくるね」

「んぐう、はっ、あ……奥ッ、ううう」

現状に甘んじて叫びつつ、そんなわけあるか、と心の中で大反論する。が、「でも」と反駁する声が胸にあがる。

（女になんてなりたくないが、今の事態に甘んじているのも事実だ）

女性の下着をつけて、尻穴を玩具でファックされて、喜んでいる。……そう、喜んでいるのだ。証拠が勃起だ。

（ケツ穴ガバガバに開発されて、勃起が止まらない。金玉が上がって……射精欲求が狂い立って……破裂しそうだ！ 射精ッ、射精い射精したいッ!!）

腰を振ると、生身のペニス揺れた。餓鬼のように飢えており、触覚も苦痛も、すべて快感として受け取ってしまう。種出し一本のワガママな肉棒だ。直接の原因はパイプだが、娘に犯されている事実も大きい。

しかしなぜ「犯す」ではなく「犯される」ことに、こんなに喜びを感じるのだろうか。

（オレは犯されなかったのか？ 女が男にされるように、挿入を受けたかったのか？ ……いや、違う。オレは……オレは）

遥香に没収されたオカズを思い出す。あれらの中には、少女が男を誇る「逆レイプ」を題材にしたものも多くあった。大の大人が、自分より体の小さなレディ達にもてあそばされ、様々な恥ずかしい姿勢をとる。女装しているものもあった。

（そうか。オレはこういう趣味があったんだ）

蹴られたいのだ。犯すのもいいが、犯されたい。被虐に近い精神だ。

納得はできなかったが、理解はした。セクシャルな気分が跳ね上がる。腰が勝手にガクガク動き、だらしくアヘアヘ鳴いてしまう。

(不浄の穴を拡張される感覚！ 女性の下着を身につけながら、いけない所を丸出しにしている感覚！ ああ、たまらない!! だが相手は娘だ。娘だぞっ)

「もう少しで最後まで入りそう。入ったら、スイッチONにしてあげる。年下趣味の変態男には、素敵すぎる」褒美でしょ？ 豚みたいに鼻を鳴らして射精してよ」

「ひいっ、ひいっ、ふ……ぐうっ。イヤだ、イヤだあ……っ」

射精なんてしない。するものか。そんな快美は享受しない。そう決意を固めたが。

ずぶっ！ ぬぶぶうっ、ぐちゅうッ！

決意もむなしく、パイプがさらに奥に突入してきた。指では届かない深部を犯され、口から胃が飛び出そうな気分を味わう。自分の体がむちゃくちゃになる感触が恐ろしい。

「あああああ！ あへっ、おっおお、重いっ、お腹が重いッ、壊れる！ お尻壊される・んぐうっ、あひいッ！」

あえぐと声が腹に響き、パイプの存在を深く感じる。それでも声を止められない。

「す……い。根本までズッポリ入ったよ。痛くない？」

「おほおッ、おあ……あひいッ」

「ああそう、気持ちいいんだ。ゆりはドMだね」

もうこれ以上は入らない。そのことを遥香に教えられた。肉体的快楽と、アレがすべて入った充足感に、悠里はうっとりしてしまふ。娘に「犯されるのが楽しいんだ」「本当は女に生まれたかったんじゃない？」とからかわれたが、反論はできなかった。

「じゃあ約束どおり、スイッチを入れてあげるね」

「ひいッ？ 待って、これ以上されたら……おッおほおお!!」

振動がはらわたを揺すぶってきた。鍛えようのない内臓を……弱いところを、ギューンギューンと蹴られる。振動が前立腺を裏からしこき、悠里は、なかば強制される形で射精した。

「あはっ、とうとうイっちゃった。お尻の穴をガン掘りされて射精するなんて、ゆりはマゾだね。……ねえ、言つてよ。私はマゾですって宣言してよ」

「おほおおッ！ あっ、ひあっ、イぐうっ、ひいっ……ふうっ。うぐぐうっ！」

射精が終わってもパイプは止まらない。容赦ない振動に、第二、第三の絶頂をゴリゴリ促される。抗えず、作りおきの居残りザーメンをふちまけてしまった。

「おおあっ！ た……頼む、止めてくれ。激しすぎる、おがじくなるう。抜いてっ、抜いてくれえ！」

「だーめ。これはまだ『弱』なんだからね。慣れてきたみたいだし……それじゃ、『強』と」

「ふひぎいいおあああッ！」

振動がさらに激しくなった。限界に達したと思った快感が、さらに一段階、高みにあがる。

「ああア……ん、いいッ！ だめ……そんなんっ、ふぎいいッ！」

腹の中でギューンギューンなる玩具に、尊厳をすべて碎かれた。射精に次ぐ射精、自分でも驚くほど短時間に連続絶頂してしまう。



（はあ……はあ、どうして。オレの体、どうなっているんだ。挿入を受けることは、本来は女の専門のはず。それで、射精という男の欲求を開花させるなんて。……それも、渠とのセックスよりよっぽど射精欲をかきたてられる！ わけが分からない）

男として女を抱くより、女になって犯される方がいいのでは……そんな思考が脳内をかすめた。だが、女が男を受ける部位と、今犯されている部位は違う。

自分は単に、アナルが弱いだけだ。いやもしかすると、普通かもしれない。男なら誰でも、アナルファックでこうなるのかもしれない。

（そうだ……それにオレは、自慰をずっと我慢していた。抑えつけの性欲を解放したから、派手にイキ散らかしたんだ）

折り合いをつけられるほど、悠里はこのとき、まだ男だった。

第四章 さらなる開発

悠里と遥香、二人の上下関係は、日増しに強固になっていった。遥香に何を命令されても、悠里は肅々と従うほかない。強みはあくまで彼女にある。

一週間も経つと、悠里は彼女に対し、下手に出るクセが体についた。妻である葉の目を盗み、悠里は何度も、遥香と破廉恥行為を繰り返した。

アブローチはいつも遥香からだった。悠里は一度も、自分から誘いはしなかった。父親である意識に抑えられていた。だが「誘わない」だけで「性欲」は感じる。

遥香のものである、女子口学生のセーラー服。これに身をつつみ……しかしパンツだけは外して、悠里はベッドに背中をつけた。

葉は今、仕事でいない。遥香と二人きりだ。思う存分できる状況だ。

（大の大人が……男が……娘と同じ格好をするなんて）

歯噛みをするが、それは心の中だけだ。身体は大喜びで状況を受け入れている。乳首は膨らんで制服を内側から押ししており、ひだスカートの中でペニスはパンパンに張っている。前かがみにならなければ、勃起の事実は隠せない。

（オレの体格が良ければ、こんな服は着られなかっただろうに）

悲しいかな、悠里は一児の父とは思えないほど小柄だ。だからセーラー服がびったり合う。

「今日はコレでゆりを犯してあげる」

目の前で、遥香がペニスを揺らしていた。ペニスバンドをつけている。

非日常的な娘の姿に、悠里は瞳孔を大きくする。まずい、と思った。だがその「まずい」は、多分の愉悦をふくんでいた。

疑似ペニスをまとった彼女は、悠里にとって、とても凶悪なカンフル剤だ。相手は見た目、ツインテールをした愛らしい少女である。ずばり好みだ。それが、股間に野卑な凶器を屹立させている。

アナルでのハッピーを憶えた身体にとって、彼女の存在は耐えがたい誘惑だ。悠里は走ったあとの犬のように、ハッハッと息を吐いてしまった。

「はい。ちゃんとこれ、塗ってね」

遥香に乳液を渡された。潤滑油を尻に塗るのは、悠里自身の仕事だ。

たつぷりと人差し指にとって、尻の中指に入れる。ちゅぽちゅぽと出入りを繰り返して、入り口をほぐした。一人での慣らしは、自慰そのものだ。

遥香の視線を感じる。

（オレは女装して、アナルをいじる姿を娘に見せている……）

勃起と腸液の滴りが止まらない。尻穴が早速トロトロになる。何物をも受け入れ可能なホットボックス。しかも乳液が白いから、精液をぶっかけられたに似た状態だ。自分の姿を想像すると、いやらしさに鳥肌が立った。

「はあ……はあ、あ、んっ」

怪しい声が漏れる。葉が留守なのが幸いだ。でなければ絶対にバレていた。

いけないと思いつつ、すばらしい性的刺激を受けられる予感に、悠里は、早くも理性を失いかける。隠語を連発しながら尻穴を両手で開き、おねだりしたい衝動があった。だがまだ、完全に墮落できていない。ホットな状態にありながら、ふと冷静に自問する。

（遥香は、いつもどこでオモチャを手に入れるのだろう）

パイプにせよ、ペニスバンドにせよ、入手先は限られている。家に荷物が届いた形跡はないから、ネット注文ではなさそう。前は「友達に借りた」と言っていたが。

（遥香は、オレの知らないところで、知らないことをやっている）

娘が遠い存在になった気がした。その意識が親子の垣根をこえさせ、悠里の性欲をさらに喚起させる。

ペニスにかかっていたスカートを、遥香がめくった。

「へえ、すごい。おちんちん、パンパンになってる。でも勝手に射精しちゃダメだよ。イくときは私に許可をとってね」

彼女の疑似ペニスに向こうを張るように、悠里の男根はギンギンだ。早く発散させなければ、爆発するような気さえる。

欲しい。犯されたい。アナルをぐちゃぐちゃにかき回されたい。

悠里の欲求を見通し、遥香はペニスの先っぽをアナルに挿れてくれた。だが奥には進まない。

「ゆり。おちんちんが欲しいときは、何て言うの？」

己のペニスの裏筋をなぞり、遥香は問いたです口調を使う。優里は口を開いた。

「お……おちんちん、私の変態アナルに挿れて慰めてください。お願いします」

父親として、男として、言うてはならないわことだ。自分の目から正常な光が消えるのが分かった。

「んー、九十点。うまいけど、ちょっと抜けてる。ゆりは、誰のおちんちんが欲しいの？ 誰でもいいの？ 例えば、その辺を徘徊しているオッサンとか、コンビニ前にたむろしているお兄ちゃんとか」

悠里は大慌てで首を横に振る。パンパンされるのは好きだが、男に犯されるのは嫌だ。あくまで女性に犯されたい。

「遥香……様がいいです」

セックス中、遥香のことは「様」付けで呼ぶ。彼女の命令だった。いわく「後輩の友達」だからだそう。

『ゆりちゃんが楽しく、変態的ファックライフを送れるよう、先輩の私が導いてあげる』

遥香が数日前に放った言葉……もとい設定だ。年下に格下扱いされるとは、実に屈辱だ。

「もう一度言い直して。最初から」

彼女の欲求を飲み、悠里は、足を開いたまま再度お願いの言葉を吐いた。自分でも驚くほど、媚びた声が出た。

「よく出来ました。それじゃ、ご褒美ね」

遥香は年不相応なほど成熟した笑みを見せ、腰を進める。巨大な逸物が、ぐうんと奥に入った。悠里のアナルは展延性が良い。根本まで疑似の摩羅を飲み込んでしまう。それでいて、尻穴はきゅつとすぼまって、相手をギチギチ締めつける。どんな刺激もあまさず受益……完全な受け入れ体制だ。

「んおあつ！ おおお、お腹っ。お腹……いっぱいすぎる！ んぐツ、いや……あ、んっ」目にハートマークを浮かべ、絶頂への道を熱心に進む。レイプの対極に位置する姿だ。大喜びで犯されている……のだが、悠里の心中は違っていた。

（くそ、くそっ！ なんてこうなるんだ。これではまるで女じゃないか。なぜ良くなる？ オレは男なのに！）

「ひぎいッ。いや……いやだ。あつ、あああ。はうっ、お……んっ。いや。やめてえ」

嫌と声をあげるも、鼻にかかって甘くなる。やめての言葉も了承の声色だ。何より、言い方がメスっぽい。男なら、腹に響く重低音で「やめろ」と言うべきだろう。そういう声も本来は出せるが、今はムリだ。

「あははっ、ゆりの声、女の子みたい。可愛いなく、もっと鳴いてよ！」

遥香の腰がいよいよ激しく、秒間より早い間隔になった。繰り返しのイン・アウトが、悠里の奥をしっかりとガン突きする。女の専売特許……妊娠の負荷を負わせようとするかのようだ。

悠里は、葉とのセックスを思い出した。下に彼女を組み敷き、腰を前後にさせるたび、彼女は淫猥な笑い声を繰り返した。

（あれは、こうした快感であげていたのか）

今なら、彼女とより良い絡みができる気がした。セックス中の女性の気持ちは、今までも一応考えていたが、具体的な実感がわからなかった。今なら分かる。相手の下になること、言いなりになって体を提供すること……そのどれもが、クセになる酔いをもたらしてくれる。

しかし、セックスで誕生させた我が子にセックスを返されるとは。とんだ因果応報だ。

（もしかして遥香は、オレを犯すために生まれてきた？ いや、逆かもしれない。オレは、遥香に犯されるために存在して……）

アナル拡張と底突きで思考が錯綜し、そんなことまで考えてしまう。もう何が何だか分からない。確実なのは、下半身から全身にのぼる気持ちよさ。オーガズムへの特急便だ。特急のくせに、ときに早くときに遅く、じらすようなスローブレイが入っているのが実に憎い。

遥香は不規則な腰振りで、こちらの予想をいい意味でたくさん裏切ってくれる。来ると思った刺激がお預け、余裕と思った刺激が激突で、まさに翻弄されてしまう。

いっそ、と悠里は考える。

もっと改造されたい。心を、体を、より低次元に引きずりおろし、墮落の肉塊にしてほしい。

「ンンンっ！ はひっ、あつ、ぎもちい。はあっ、あああア」

摩擦の刺激を受けるたび、尻穴はヒクヒクと蠢いた。犯されることに抗議をしつつ、これこそ私の役割であると受容もしている。だが、悠里の身体はあくまで雄だ。受ける気分になればなるほど勃起する。性器の充血はまったく止まらず、発射寸前になっていた。

口の端から涎がたれて、悠里は少し苦さを味わった。あえぎすぎて喉が枯れかける。黙りたいが、貰かれると声が勝手に、喉から外へ転がり落ちる。

「はあっ……ああ、イぐっ。お願い。イかせて。遥香……様。お願いします。気持ちよすぎて、も……おかしくなりそう。イかせて。射精させてくださいっ」

ダメと言われても射精してしまう、そんなところまで追いつめられていたが、悠里は遥香におねだりをした。被虐を受け入れた悠里の体は、こうした「お願い」を娘にすることをも喜びにしている。

「へえ。娘にケツ穴掘られながら、子作りエクス出したいんだ？」

水商売の女性でも言うか怪しい下品な言葉を、遥香は、可愛い唇からぽんと出す。

基本は友達扱いなのに、時に「パパ」呼ばわりをして、事実を想起させてくる。残酷だ。それ
がいい。

「ていうか、言わないと射精もできないの？ 性欲強いくせにヘタレだね」

「勝手に射精するなって言っただじゃないか！」

ややヒステリックに叫んでしまった。彼女は鼻で笑った。

射精の許可をうやむやにし、遥香は腰運動を激化させる。すこし息を荒げていた。が、悠里はそれ以上に息があがっていた。前立腺をゴリ押しされて射精欲が止まらない。深呼吸をして落ち着きたいが、そのたびに深部をドつかれる。浅いブレスを繰り返すのが精一杯だ。

強い高揚感に、息が何度か止まった。射精を望みすぎ、生命維持すらおろそかだ。極限に近い状態だ。

「お願い……です、射精っ、射精させてください！」

「私に許可をとるなんて。父親と娘の立場が逆だね」

彼女は悠里の、めくれあがったスカートから覗く睾丸と男根に、視線をただ往復させる。ゴ—サインはくれない。

じれて、悠里は再三、懇願した。

「はいはい。じゃーほら、射精して」

彼女はぞんざいに言葉を投げる。お前みたいな変態は勝手にイけと言わんばかりだ。下等生物として見られ、悠里は肌を粟だてる。理性が、切れかけの縄のようにプチプチと音をたてた。

「……まだイかないの？ いままで汚い液を貯め込んでるのよ。射精してって言っただじゃん。いきなよ。ペニバンでガチ掘りされて生産した女装精液、私の前でぶちまけて見せて」

心に染み渡る屈辱が、悠里の頭の中に火花を散らせる。それはそのまま、精液の飛散に繋がった。

男根が白い汚濁を散らせる。受精用の……男特有の液体が、女装した悠里と遥香、両方を穢した。

肉欲のくびきから解放されつつ、悠里は「オレは男なんだなあ」とぼんやり思った。女の衣装を身にまとっても、精液を出すのだから。

第五章 和奏の元へ

街中の路地。カフェや雑貨店など、明るい店が軒をつらねる中、悠里は下を向いて歩いていた。自分がどこに向かっているのかは分からない。ただひたすら足を動かす。

「ゆり、そんなにうつむいてちゃおかしいよ」

隣では遥香が、何の気兼ねなく歩を進めている。彼女がうらやましくて仕方ない。

いま悠里は、夏物の白いワンピースを着て歩いている。すそにはフリルが、首元にはリボンがあらわれていた。肩には斜めがけのピンクのポシェット、頭にはさくらんぼのチャームがついた髪飾りをつけている。すべて、遥香が二年ほど前に身につけていたお古だ。

一番目立つのはワンピースだが、カバンや髪飾りも悠里にとっては問題だ。素材もデザインもティーン向け。女性であっても、悠里と同じ年なら身につけない。遥香には「似合う」と言われたが、鵜呑みにできるほど、悠里は楽観的ではなかった。

すれ違う人の視線が気になる。誰かの目を意識するたび、股間がきゅんと縮こまった。ペニスの存在がバレたら最悪だ。女装して歩く変態として指さされる。

ふと風が吹き、スカートがぶわっとめくれあがった。道ゆく女性たちが、スカートやワンピースを手で軽くおさえる。悠里は両手を使い、脂汗をかきながら強くおさえた。下から入ってきた風で、大事なところがスースーする。ズボンに比べると、たいへん心もとない。女性はこんな思いでスカートの類をはいているのかと、いまさらだが驚いてしまった。

「オレ……私達、どこに向かっているの？」

周りに聞こえないよう、小さな声で尋ねた。万が一を考え、口調は女性を模す。

（こんな所をダラダラ歩かず、人目のないところに行きたい！）

頭にあるのはそればかりだ。

すれ違った女性が、チラッとこちらを向いた。目と目があう。相手は、風になびく髪を手でおさえて下を向いた。口元に嘲笑を浮かべたように見えた。

悠里はワンピースをおさえる手に力を入れた。冷や汗がにじみ出る。悠里の肉体は男性だ。仕草は元の性別のままである。不自然がない方が不自然だ。

「私達、和奏の家に行くんだよ」

やきもきしている悠里に対し、遥香は鼻唄をうたうような調子で答える。

「学校でゆりの話をしたの。男だけど女の格好をするのが趣味の人だよって。そうしたら、ぜひ会いたいって」

「冗談だろ?!」

自分の格好を忘れ、悠里は大きめの声で叫んでしまった。何人かに振り返られたが、目の前が真っ暗で意識できない。

（知られた。他人に……女装のことを……）

会いたくない。今すぐ回れ右して帰りたい。だが遥香の意にそぐわないことをすれば、秘密を葉に暴露される。

通行人の視線を気にしつつ、人気のない路地にたどり着いた。家から此処まで、所要時間は徒歩二十分ほどだった。悠里には半日近くに感じられた。スーツ姿で丸一日、競歩をした方がマシだと思った。

「ほら見えてきた。あのお家」

遥香が指す建物を見て、悠里は思わず立ち止まった。絵に描いたような豪邸だった。直線で彩られたモダンな建物で、白い壁が陽の光を反射し、燦然と輝きだっている。遠目からも、広いテラスがあることが伺えた。

「和奏ちゃんの家は、ママがいらないんだ。パパと二人で暮らしているんだって」

「へ、へえ……」

「パパはお医者さんなんだよ。だからお金持ちなんだ」

そんなお宅にお邪魔するのに、悠里は、白ワンピース姿でピンクのポシェットとさくらんぼ飾りをつけている。場違いもはなはだしい。みじめの見本のようなものだ。

悠里は「オレがお邪魔してもいいのか」と遥香に尋ねた。ダメ、と言われることを期待していた。しかしそんな答えが来るはずもなく、

「平気だよ。家にはいま、和奏ちゃんしかいないから」と言われた。

家について呼び鈴を鳴らすと、和奏が出迎えてくれた。写真で見たとおりの、悠里の好みにあう可愛い子だ。むちつとした四肢、ばつんと切られた前髪、ゴールドデントリバーの子犬のような人懐っこさ。身にまとっているのは、レースのついた白いブラウスと青いスカートだ。シンプルだが上仕立てで、金持ちのお嬢さんといった感じである。

以前の悠里なら「犯したい」と思った。今もそれは変わらない。が、遥香に調教されたせいか「犯されたい」とも思ってしまう。

悠里の下劣な欲望をよそに、和奏は家の中を軽く案内してくれた。部屋には洗練されたスマートな家具が並べられており、モデルルームに似ていた。使用人の一人や二人、いてもおかしくない雰囲気だが、人の気配がない。

「僕の部屋はこっちだよ」

通されたのは家の奥、三階の一室だった。机の横には通学カバンが、上には教科書などが並べてあり、いくらか生活のおいがする。

ベッドに腰かけるよう言われたので、遥香とともに従った。スプリングが程よく効いた、上質のマットレスだった。

「ゆりちゃんは、遥香ちゃんのパパだったんだよね？」

愛嬌顔で和奏は言う。過去形なのが引かかったが、女装姿では高らかな父親宣言も厭しい。

悠里は「うん……まあ」と歯切れ悪く答えた。

「かわいいパパだね。遥香ちゃんの妹って感じ」

「おい」

せめて姉と言ってくれと思ったが、続く遥香の一言でそれは吹っ飛んだ。

「和奏ちゃん、すごい！　そうだよ、ゆりのおちんちは妹サイズだよ」

「おい！」

「和奏ちゃんのアレ、見せてよ」

「うん」

和奏が自身のスカートをめくりあげた。大人っぽいランジェリーを身に着けていたが、不自然に膨らんでいる。彼女はさらに下着も下げた。ぶるん、と揺れながら男根が飛び出す。悠里より

ずつと大きい。洋物のアダルトビデオにしかないサイズだ。ペニスの後ろには、ずつしりと、見るからに重そうな金玉までついている。

「お……男、だったのか？」

「違うよ。僕はふたなりなの。パパに創ってもらったんだ」

無邪気な笑顔の一言に、悠里は強いめまいを感じた。娘に男性器をくつつけるとは、いかななものか。

「女の子の和奏ちゃんでさえ、これだけ立派なモノを持ってるんだよ。だから、ゆりも女の子だよね」

「いや、オレは」

「ゆりちゃん。女の子同士、仲良くしようね」

そう言っただけで腰を突き出してくる。巨根がぐんぐんと迫ってきた。悠里は反射的に身を引くようになったが、ビビったと思われては癪だこらえた。

あんなもの、ただの体の付属品だ。手や足の同類だ……と、へたな自己暗示をかけたが。

（ちよつと待て。そもそもこの子、なんで勃起しているんだ？）

怪しい現実思考が冷える。

（いつから、何に対して勃起した？ 遥香か。それとも）

和奏の視線をびしびしと感じる。性欲の対象として見られている感覚がある。

（まずい。犯される犯される……ッ！）

危機感がつのる。が、それと同じくらい期待もつもの。この、太い摩羅が与えてくれる快感が知りたい。少女に犯されたい。

「物欲しそうな顔をしているね、ゆり」

遥香の声が刺さる。無意識に、尻穴がきゅつとすぼまった。和奏と一対一ならまだしも、娘のいる前で彼女と性行為なんてムリだ。不潔すぎる。

（だがオレはもう十分、まずいことをやっているし……）

調教された身体と開発された尻穴が、新たな罪を作る免罪符になる。ワンピースの中で、悠里の男根はぐんぐんと大きくなった。今は女性用の下着をつけている。狭い布地が、視界の陰で TENT を張った。

「ゆりちゃん。僕のおちんちん、舐めてくれない？」

和奏はペニスを上下に揺らす。かさ高いカリと太い刀身に、隠しきれない食欲さがある。

欲しかった。できれば尻に挿れてほしいが、しゃぶるのでも構わない。うら若い少女のペニスなんて、他では味わえない貴重品だ。

だが悠里は、素直な感情に抵抗した。

「イヤだ。なんで、そんなものを舐めなきゃいけない？」

オレは男だ、男がペニスを舐めるなんて……という意思を、言葉の裏に含める。それを遥香が「いいじゃん」の一言で打ち消した。

「ゆり。今まで使っていたパイプやベニバン、どこから持ってきたか知ってる？」

「何だ、いきなり」

「ぜんぶ和奏ちゃんに借りたの。あれでいっぱい、気持ちよくなったでしょ？ だから、恩返しなきゃ」

悠里が「男だ」という意思を暗に含めたのと同じように、遥香の声は「命令」の意図を含んでいた。

（しょうがない。秘密を棄てたら困るし……）

やむを得ない風を装いつつ、嬉しい気持ちを秘め、悠里は、自分より大きな若年ペニスを頼張った。刹那、えぐみが口の中いっぱい広がる。

悠里は過去、興味半分で自分の精液を舐めたことがあった。それとよく似た味がする。

（この子、射精もできるのか）

和奏の不思議な体に困惑しつつ、ちゅぼちゅぼと出し入れを繰り返す。奴隷が主人にほどこすような、哀れみの多い猥褻行動だ。

ペニスの濃厚な味を薄めようと、口の中に唾が溜まった。飲み込むのが嫌で、唾液を和奏にねだくった。大量のそれは垂れて、悠里の胸や腹を汚した。

「んぐっ。はあ……ゴホッ、あふっ。はあ……ああっ」

大量の唾に流され、精液の臭さは薄れてきた。

和奏を自分の味に染めながら、悠里は「なぜこの子のペニスは、こんなにも精液臭かったのだろう」と考えた。

（オレたちが来る前、自慰でもしていたのか？）

出迎えてくれたときの彼女を思い出す。大人しそうで、ともすれば、性的なことは何も知らないように見えた。だが実際は、熟成した雄の肉棒を抱えている。

遥香が「玩具を貸してくれた」と言ったことを、悠里はぼんやり思い出した。

（今まで知らなかったけど、オレ、間接的に、この子に犯されていたのかな）

腹の奥に響く、強い振動を思い出す。股がきゅんと興奮した。牝的なバイブスを感じつつ、悠里の体は男の反応……勃起を、激しくした。

「ゆりちゃんのお口、あったかくて、気持ちいい。でも、もっと強い刺激が欲しいなあ」

和奏の声は、相変わらずおっとりしていた。だが獣性の裏打ちがある。悠里は、彼女の我慢が限界に達しつつあることを悟った。

立派なペニスの持ち主を、口一つでここまで追いつめた。そのことに自尊を抱いたが、直後、憂いに襲われた。

（女装して、チンポを気持ちよくさせて、誇りに思うなんて。オレは男娼か？）

男娼について深く考えたことはなかったが、男に奉仕する男は、見下すべき対象だと思っていた。それと同格になる自分……想像すると、被虐心がくすぐられる。だがその思いすら碎かれ、さらに下方へ向くことになった。

「犯したくなっちゃった」

あけすけな言葉を、和奏は荒い息で放つ。

「この子、やってもいいよねえ？」

和奏は遥香を見て言う。性欲あふれる乱暴な物言いだ。彼女は、最後の理性で許可を切望している。だが、当の本人である悠里のことは無視だ。

（オレを犯すのに、遥香に許可をとるのかよ）

暗に「お前は遥香の『モノ』だ」と言われている気がした。人間以下の扱いだ。

悠里の体は震えた。墮とされるのが気持ちいい。その思考を卑下する自分が心にいるが、己からの罵倒にすらゾクゾクする。彼女への舌使いが激しくなった。蛇のように巻きつき、チュウチュツと濁りある音をたてて吸う。溜まる唾液は、男根がかく汗とともに飲み込んだ。

思いついたすべての技を試した。彼女の快感を攻めあげ、同時に自分も情火に墮とす。遥香が許可を出すのが聞こえた。刹那、荒っぽく頭をつかまれ、強引に口から男根を外された。

和奏と目があった。彼女は口の端から涎を垂らし、目を血走らせていた。ぱつんと切った前髪が、汗で額にはりついている。大人しい少女という仮面が、射精欲ありあまる脂ぎったオスに飲み込まれた瞬間だった。

寝て、の言葉とともに、悠里はベッドに押し倒された。倒されたといっても、半分は悠里が自分から倒れた。和奏は悠里の足元にしゃがみ、下着を完全に脱ぎ捨てた。

彼女を待つ間に、悠里はワンピースの裾をはしたなく広げ、自ら足を抑えて開脚をし、恥部を開帳させた。高ぶる被虐心と性欲……二重の墮落からくる「犯されポーズ」だ。遥香に受けた調教が活きている。

遥香の手が、ワンピースの中に隠れている悠里の乳首をつまんだ。唾液で服が濡れたため、小さな突起は、外目にもあらわになっていた。

「遥香ちゃんのオナホ、すこいね」

スカートを揺らしながら和奏が言う。勃起ペニスがすそを持ち上げていた。倒錯的な姿を見せつけられ、優秀はいやらしい乾きを感じた。メスイキを教えられた今、悠里は心身ともに、掘られることを望んでいた。

「このまま挿れていいかなあ」

「そうだね。和奏ちゃんのおちんちん、オナホの涎でぐしょ濡れだし」

遥香は視線を、和奏のペニスに往復させる。見られた和奏は恥ずかしそうな顔をした。淫らな欲に満たされていた悠里も、一気に羞恥の汗をかく。足を押さえる手を緩めた。

「こいつすぐマゾ液漏らすから、このままバコって大丈夫だよ」

「じゃあ、やる」

端的な言葉で、和奏は挿入を開始する。悠里のアナルにいきなり亀頭をあてがい、腰を進めた。

「んっ！ だめ……裂けるっ。あっ、くうっ。ギツイ……イ、あああッ」

ぶつかりあう肉体がギチギチと悲鳴をあげている。

（慣らしもローションもなしでセックス！ これじゃ本当にモノ扱いだっ）

口に感じていた幸福で、アナルは勝手にほぐれていた。彼女に欲望を押しつけられることを望んでいたのだ。だが実際受けてみると、和奏はあまりに巨根すぎる。唾液と、ひっきりなしに漏れるアナル液が挿入をなめらかにしてくれるが、まだ足りない。

「いやだっ！ あっ、あああ……やめろ、やめろお！ んぐっ、おおっ……お、犯さないで。離して。いやだあっ！」

悠里は拒否の声を繰り返した。あの巨根……一歩間違えれば、自分の体は、二度と使い物にならなくなる。尻穴での幸福をもらえなくなる。アナルセックスを続けること前提の拒絶だ。悠里の欲望は勃ち続け、抽送の動きにそってヒステリックに揺れている。何しろ相手は年頃の少女だ。繁殖欲求を刺激される。それを助長させるように、彼女は挿入しながら、小刻みな前後運動を繰り返す。軽やかな反復がアナルの奥をほぐしてくれた。悠里の中で、受け入れ体勢が加速する。

「無理っ、こんなの入んないッ！ ひぎいッ！ おはっ、はあっ。し……死ぬ。死んじやう！ ああ、助けて、ダメえ！ お尻の穴、ガバガバになっちゃう。串刺しセックスで一生分のセックス終わっちゃう！」

「ゆりちゃん……本当に、女の子みたいだねえ」

下半身を荒れ狂わせて和奏が笑う。

女の子「みたい」の言葉に、悠里は、自分が男であることを思い出した。

男が女のペニスに犯されるという、不自然な営み。しかも娘が付き添っている。あらゆる角度から、罪悪感が心をくすぐる。残酷にも、それは快感に変わって腰に走る。

ズンッ、と腹の奥に一撃を喰らった。和奏が限界まで挿れたのだ。彼女のペニスは、今まで犯されたことのない場所に到達していた。処女は遥香に消されたのに、今また。破瓜を迎えた気分になった。

「ひいんっ、だめっ……おほっ、おほ……ひっ?! 今度は抜ッ……おほお！ らめえっ、ああっ早いッ早すぎいいイグウッ！ チンポ引き抜かれてイっちゃうッ！」

腸内を圧し殺していたものが抜けていく。ずるずる擦られる感触は、排泄によく似ているが、それよりずっと大きい上に、こちらの意思が全く効かない。

妖気ともいえる、怪しい気配が悠里のペニスに充滿する。自製の意識が追いつがって歯止めをかけるが、効かない。

尻から抜けそうになったペニスが、再び中に戻ってきた。悠里の体は、既にその大きさを知っている。だからといって、完全に慣れたわけではない。

「んうっ、はあ……あ、おほお大きいっ。ぐっ、あ……あ」

和奏の、小柄な体躯にあわぬ重い腰つき。穴の強引な引き伸ばし。無作為なイン・アウト。全てが最高に気持ちいい。悠里のオスまんこはミチミチと嬌声をあげながら、ふたなり少女の男物を締めつける。

「あっ……ああ、ひいッ、おほおッ、んぐいッ、あ……ああああ!!」

低俗で力強い頭突きが、破られたばかりの処女の部分……奥の奥をまた犯してきた。悠里の体は、それを押し返すすべを持たない。恭順する己に動転しつつ、悠里はついに、我慢に終止符を打った。罪の意識と共に、億の精子を解き放つ。

「ゆり、もうイっちゃんだ。和奏ちゃんのふたなりチンポ、そんなに良かった？」

遥香にからかわれても返事ができない。



出産後の妊婦のように、悠里は、腹を使って大きく呼吸した。こうすると、体内に収まる巨根をより感じられた。程よい余韻にひたれる。

常ならこの後、速やかに賢者タイムに移行する。今回は、そうはいかなかった。

和奏が、絶頂を迎える直前の者特有の、とろける笑顔を見せる。彼女は再び、活発の境地に入った。パンツパンツと荒々しい音を部屋に響かせ、男根をしつこく悠里にくぐらせて、心身を別次元へ押し上げる。悠里の早漏ペニスは力なく揺れ、先端に付着していた精液が飛び散った。女性への中出しを許されず、受精の機会を完全喪失した哀れな子種だ。

（遥香の前で、女装を見せつつアナルセックスでイクなんて）

射精したせいで、あさましい欲望はあらかた消えた。和奏は激しくサカっているが、悠里はどんどん冷静になった。

穴を強引に広げられる感触に鳥肌が立つ。好む好まずに関わらず、与えられる刺激に順応していた。今更ながら恐ろしく、早くセックスが終わってほしいと思った。

唐突に、遥香にオナホと言われたことを思い出した。

（オレは今、和奏を気持ちよくさせるためだけにある）

人ではなく、モノ。目下のレッテルを貼られた事実、心をどろりと侵食される。歯噛みしたい悔しさと同時に、不潔な快感が渦をまく。

「ゆり、また勃起しているね。もう一回イきたいの？」

萎えたはずのペニスが、再び盛り上がっていた。旺盛な性欲に、悠里は驚きを隠せない。

（オナホ扱いでよがるなんて！）

体を激しく揺らされ、胎動のような衝撃を受けた。腹の奥が「どぶっ」とうねった気がした。和奏が大きく息を吐く。のぼせを誘発する熱い液が満ちてゆく。

フェラで味わったえぐみを思い出す。あれと同じものが、体内に射出されたのだ。氷水に飛び込んだように震えが止まらない。子作り液の中出しなんて、女の体験の真骨頂だ。男が味わうものではない。

（オレは男じゃない。でも女じゃない。何者だ？）

ペニスの半端な膨らみ具合が、揺れる心を映している。悠里は無性におかしくなって笑った。下半身を丸出しにし、ふたなり少女と繋がったまま、自分の存在を定義しようなんて。滑稽にも程がある……と。

二回目を求める淫乱ペニスを、悠里は、遥香の手コキで慰めてもらった。シコシコされている間、和奏に再び淫らな体液をぶちこまれ、牝に墮とされた。

終始、二人にはオナホと呼ばれた。だがオナホに手コキをほどこす者など普通ない。娘の官能的な手技に、悠里は、人としての尊厳を与えられた。父親としては墮落の極みだが、悠里は大いに満足した。そんな自分を嫌悪したが、どうしようもなかった。

事後。精液やよだれで服を汚してしまったため、和奏から新しい服を借りることになった。今着ている白のワンピースは、洗濯してくれるという。遠慮をしたかったが、これを持って帰り、家で洗濯することを考えると、彼女の提案にうべなうほかなかった。道中で通行人に発見されることはもちろん、葉に見つかることは絶対に嫌だった。

新しい服は、質素ながら上質の、黒いワンピースだった。白にくらべると透けづらく、目立ちにくい。悠里は内心でほっとした。

「あと、これ。僕からゆりちゃんへプレゼントだよ」

帰り支度を整えていると、和奏に薬の入ったアルミ製ヒートを複数手渡された。何の変哲もない白い錠剤が入っている。表面に刻印はない。数は全部で三十錠あった。

「一日一粒、食後に服用だよ。いつ飲んでもいいけど、なるべく毎日同じ時間に、コップ一杯の水で飲んでね」

彼女は薬屋の店員のように言う。本物の店員なら「飲み忘れたらその日の分は飛ばし、一度に二錠は飲まないでください」などと続けるところだ。だが。

「飲み忘れたら、お尻にパイプ突っ込んだ状態で外を散歩だよ。コースは△学生の通学路がいいな。遥香ちゃん、よろしく」

「はい」

遥香は平然と明るく返事をした。自販機でジュースを買ってきて、と頼まれたような軽い調子だ。しかし悠里は顔を引きつらせた。パイプを突っ込まれた状態で歩くなど至難の業だし、外なんてとんでもない。通学路なんて最悪だ。

飲み忘れないようにしよう。万が一忘れたら捨てよう。そう思ったが。

「ゆりが、ちゃんと薬を飲むよう、私が見張っておくからね」

遥香に先手を打たれ、舌打ちしたい気分になった。

「ところで、これは何の薬なんだ？」

悠里の質問に、和奏と遥香は一瞬顔を見合わせた。いかにも怪しい。

「栄養剤だよ」

少し早口で和奏が言う。当然の反応として「本当か？」と悠里は疑った。

「違うって言ったら、飲まないの？」

「……」

その選択肢は、残念ながらありえない。

「毒じゃないから安心して。ゆりちゃんが女の子として、活躍できるようにする薬だよ。一か月後に薬が切れると思うから、また来て。新しいのを渡すよ。それ以外にも、何かあったら、いつでも相談しに来てね」

「う、うん」

相談なんてできるか、と言いたい気持ちに悠里は飲み込んだ。口の中で溶けない薬を、水なしで無理やり服用した気分だった。

女性の服は男性のそれとは異なり、基本的にポケットがない。ヒートは、遥香のお古のピンクポシェットに入れた。持つのが恥ずかしいお子様バッグだが、皮肉にも役に立った。

和奏に見送られ、遥香と一緒に帰路につきながら、悠里は「おかしいことが起こりませんように」と心の中で祈った。

こういう願いは往々にして、碎かれるものだと思っていたながら。

第七章 体調変化

いつ飲んでも良い錠剤を、悠里は毎日、朝食後に服用した。このタイミングは遥香の命令だった。

『朝なら、ちゃんと飲んだか見張れるもん』

とのことだ。だが朝は葉がいる。隠れて飲んでいたが一週間後にバレた。

見つかった直後、悠里はすっかり取り乱し、簡単な言いわけすら思い浮かばなかった。幸い、遥香が取りつくろってくれた。

『栄養剤だよ。パパ最近、顔色があんまり良くないから、疲れてるんじゃないかと思って勧めたんだ。私の友達のお父さん、お医者さんなんだけど、その人のお墨付きだよ。すっぽんとか、亜鉛とか、マカとか、色々入っているみたい』

葉は苦笑いをして「いやあね」とだけ言った。遥香が並べ立てた成分名は精力剤によく見られるものだ。それを「疲れている」夫が飲むなんて……セックスを暗示している。悠里はヒヤヒヤしっぱなしだったが、妻の追求を逃れられてほっとし、遥香に感謝をした。

やがて悠里は、肉体の変化を感じるようになった。最初に違和感を覚えたのは胸だ。女性のようにはふくらんでいる。次いで陰茎が縮み、勃起をしてもあまりサイズが変わらなくなった。精液も薄く・少なくなり、射精しても先走り程度しか出ない。声も高くなった。

原因は不明だ。だが、飲んでいる薬のせいだろうと思った。

（あれはホルモン剤なのか？）

和奏が「女の子として、活躍できるようにする」と言ったことを思い出した。彼女が言わんとしていたことは、つまり、これだったのだろう。

薬を飲む気がなくなった。性行為中こそ女の快感をあんまり叫ぶが、本質的には男なのだ。女性にはなりたくない。だが服用は止められず、体は変わっていく。

三週間ほどした休日。悠里は床屋に行くため家を出ようとした。髪が伸びたので切ってもらおうと思っていた。しかし遥香に止められた。

「髪は切らないで。伸ばしてよ。その方が可愛いから」

傍からすれば、ただのワガママなおねだりだ。だが悠里にとって、遥香の言葉はすべて「命令」だ。言われたとおり、髪は切らないことにした。

その三日後、今度は遥香にブラジャーを渡された。淡いピンク色で、全体がレースで彩られている。若い女性が好みそうな愛らしいデザインだ。彼が知っているもの（つまり葉の持ち物）に比べると柔らかみがあり、締めつけが少なかった。

「ゆり、最近おっぱいが出てきたでしょ？ だから、これつけて。ノンワイヤーでつけ心地がいいよ。あと、こっちはナイトブラ」

遥香は、新たに白いブラジャーを出した。こちらは一層柔らかい。アジャスターやカップがなく、ゆるい造りだ。宣伝タグがついていたが、それには「寝ながら育乳」と書いてある。寝る時につけるブラなのだと分かった。だから「ナイト」ブラなのだろう。

「こ、これは……さすがに無理だ」

二つのブラを持ったまま、悠里は顔を引きつらせた。そんなことをしたら、葉にバレる。

「大丈夫。服を脱がなきゃ分らないって」

遥香は強気の姿勢を崩さない。

「パパは今、女の人の体だもん。ノーブラの方がおかしいよ」

私と同じくらい胸があるもんね、と彼女は笑う。

「ブラつけなきゃ、おっぱいが揺れるよ。ぶるんぶるんさせてたら、レイプされちゃうよ。……
されたい？」

悠里は慌てて首を横に振った。

「じゃあつけて。いい？ 毎日だよ」

拒否権はない。頷くしかなかった。

その日から早速、ブラをつけて生活することになった。意外と悪くなかった。上半身への締め付けに、気が自然と引き締まる。動く際に生じていた胸の揺れがなくなり、活動しやすい。

菜とは極力、身体を離すよう努めた。脱がなくても、抱きつかれたらブラの存在を知られてしまう。それは絶対に避けたかった。

悠里は事あるごとに、ブラの存在を知った菜の顔を想像した。口の端を引きつらせ、ウジ虫を見るような目をこちらに向けている。言いわけをするほど彼女の顔は嫌悪にゆがみ、最後は「来ないで、変態」と鋭い声が飛んでくる。考えるだけで焦りが生じ、背中に嫌な汗をかいた。そのくせ、心地よさを感じてしまう。バレないよう気をつけながら、バレることを望んでいる自分がいた。

悠里の変化を、菜は少しずつ感じはじめていた。彼女は生来、カンがあまり鋭くない。それでも、夫の様子がおかしいことには気がついた。

（悠里は最近、私のことを避けている。どうも変ね）

夜、久しぶりにセックスを誘った。だが悠里は応じなかった。彼は「疲れているから」と言ったが、それだけではない感じがした。

ついに菜は浮気を疑い、夫の机の引き出しをあさった。そこで和奏の写真を見つけた。

菜は、彼女の存在を知っていた。過去に一度、遥香から「友達だ」と紹介されたことがあったのだ。だから何も思わなかったが、洋服ダンスをあさって顔色を失った。奥から、女性用の下着が出てきたのだ。見覚えのないデザインで、使われた形跡がある。

最初は、遥香のものが紛れこんだのかと思った。だが、シャツならともかく、ブラジャーだ。しまう時に分かるだろう。

引き出しの写真と、見知らぬ肌着が符合する。

（まさか、遥香の友達と……？）

ありえない、と思った。だが遥香が前に言った言葉と、悠里が毎日飲んでいる錠剤が頭に浮んだ。白い粒の内容は、どうやら精力剤。その提供主は「遥香の友達」だそうだ。疑惑がつのる。

その日から、菜は悠里を注意深く観察した。こっそり携帯電話も確認した。怪しい連絡は特になかったが、一点、気になるものを見つけた。スケジュール帳に今週末、予定が入っているのがある。文字はなく、ただ★のマークがついていた。この日に、和奏と逢引するのではと考えた。

そして迎えた週末。悠里は「買い物に行ってくる、すぐ戻る」と言って家を離れた。菜は何食わぬ顔をしたあと、こっそり彼を尾行した。

悠里はつけられていることに気がついていない。スマホ片手に、地図を確認しながら進んでいる。不慣れた様子だ。

途中、曲がり角を行く彼の顔を見たが、不安な様子だった。浮気相手の元へ行くには、ずいぶんと沈んだ表情に見える。葉は、自分の予想が外れることを祈った。

悠里は、住宅街の並ぶ通りで消えた。どこでいなくなったか判然としなかったが、病院が一軒あった。白い壁に、スタイリッシュな文字がオレンジ色で綴られている。程なくして玄関から彼が出てきた。悠里は慌てて隠れ、やり過ごした。

(病院に行くなら行くで、素直に言ってくればいいのに)

だが最近の悠里の様子を思い出し、ある疑いを持った。セックスに応じず、精力剤を飲み、病院に内緒で通う。これは……もしかして。

(勃起しない、とか?)

葉は唾を飲んだ。妻として、夫の股間の具合は把握しておきたい。

名乗れば教えてもらえるだろうか、それとも追い返されるか……迷いつつ、扉の前に立つ。深呼吸をして心を落ち着かせ、ドアのノブに手をかけたその時。内側から扉が開いた。

「いらっしゃい」

和奏が、にこやかな表情で佇んでいた。

「んおほおッ！ あひつ、あええッ、おっ……んぐっ、おおお、おっぎいいッ！ んひいいッ、ごわれる、おまんこ裂けるウ！」

下着すら外した完全な裸で、葉は胸を揺らしながら叫んだ。乗っているのは診察台だ。普通のベッドより硬い。与えられる衝撃が吸われず、体にダイレクトに響く。

両足は和奏に抑えられていた。服を脱いだ彼女は、ひどく奇妙な姿をしていた。上半身は女性であり、ふつくとしたツヤの良いバストを持っている。広めの骨盤は、子を宿すのに良い塩梅だ。だが股間には、男性にしかないモノをそびえさせている。……今は、大半が葉の中に入っている見えないが。

（私、何をやっているの？ 何で……こんな、病院で、セックスなんて）

こうなるまでの流れを思い返す。どうぞと和奏に招き入れられ、茶をこ馳走になった。そうしたら体がほてり、その後は……思い出せない。気がつけば互いに裸で、ベッドの上にいた。膣は濡れてわなないていた。

茶に、何か入っていたに違いない。だが考えられるのはそこまでだ。

「んひっ！ おおッ、あ！ んひいいッ、おおッ大きい……大きすぎるう！」

和奏が腰を動かすと、二人の体が派手にぶつかる。淫らな音が、部屋に、葉の体の奥に、強く響く。大太鼓を思いっきり鳴らしているような特大ノイズだ。激しすぎる衝撃波を与えられる。バコッ、バコッという強烈な穴埋めが脳天を突き抜け、神経がぶち壊れそうだ。

葉は幾度となく、腰をカクつかせてアへ声をあげた。居残っている理性が「今のお前は、普段の五割増しでバカに見えるぞ」とささやいてくる。それでも止められない。

強烈すぎるベニス圧から逃げたいと同時に、諸手をあげて歓迎したかった。けれど、罪悪感はあるものだ。相手は娘の友達である。しかも自分は既婚女性だ。

（悠里、ごめんなさい。私、いま浮気しちゃってる！ 貴方の浮気相手と疑った人と、私……ああ、ごめんなさい、ごめんなさい）

止めたと思った。何度も、和奏を払いのけようとした。しかし力が入らない。すべてのエネルギーは女性器に向かっており、巨大ベニスを味わうことにあてがわれている。腕や足はただの飾りだ。

「僕のチンポとゆりちゃんのチンポ、どっちが好き？」

尋ねられた。答えはもちろん前者一択だ。

それを叫ぶと、彼女は喜んだ。元々大きかった逸物が、さらに輪をかけて大きくなる。

「嘘っ、また大きくなるのっ?! ああッ、んんッ、だめ……え、あはっ、あゝ！ んぐっ、来るっキてるっ。えへっ、すっすぎるうッ!!」

葉の出す愛液、和奏の先走り。それに二人の汗が加わり、膣の中はアダルト臭を濃くしていた。反乱する性欲に操られ、股が乾く暇がない。その昔……悠里と、妊娠につながるセックスをした時より、はるかに気持ち良かった。真の悦びと出会えた気がした。

葉の肉体は、彼女を飲み込み続けて止まらない。少しでも和奏の動きが止まると、葉は自ら腰を振った。自ら下半身を彼女にこすりつけ、全身でベニスを誘ってしまう。

「いいこと教えてあげる」

葉の生理を犯しながら和奏はささやく。

「僕ぐらい巨根だと、どんな相手でもキツマンに感じられるんだ。でも葉ちゃんは特別だ。だって君、ゆりちゃんの奥さんと、遥香ちゃんのママでしょ？」

彼女の言葉はやけに説明的だ。こんなふうに喋れるくらいだから、和奏はまだまだ余裕なのだ。

「このオマンコに、悠里ちゃんを受け入れて、十月十日で遥香ちゃんを産んだんだねっ。おかげで僕、遥香ちゃんに出会えたよ。中出しされてくれてありがとう！」

馬鹿みたいに生々しい話をし、彼女は力強く腰を進めた。行き止まりを確認するように、和奏のペニスはぐぐつと奥を突いてくる。

「おれに、ふたなりチンポでたっぶりお世話してあげるね」

といって彼女はマイナス距離からのガン突きを繰り返す。葉は白目をむき、舌を突き出した。人から獣に成り下がりがり、求愛しながらペニスにかしずく。妊務を達成したくて必死だ。

「んえっ、あう、あいいッ。おあッ……あ、ああんっ。あんっ、んあア！」

夢を見ているんだ、と何度も思った。しかし、メスの根源を揺さぶる衝突は、幻というには生々しすぎる。

「んあっ、あひいッ……おっ、ああっ、おあっ、んもおっ！ ああんっ！」

気持ちいいという言葉すら、気持ちよくなるために棄てた。彼女の習熟した腰使いに全面降伏だ。イクイかないの問題ではない。潮を吹くのが先か、意識が飛ぶのが先かだ。

「葉ちゃん……ッ、はあ、僕、もう……ッ」

和奏が苦しい息を吐く。首を絞められているかのようだ。彼女もまた、己の巨根に振り回されている。男根がつむぎ出す素晴らしい刺激に押され、自分で自分の息を殺しているに等しい。

葉は白い腹部を波打たせ、身体を強張らせて膣奥をいやらしく痙攣させた。

「あっああ、だめっ、いッ……んああっ、ああッ、はあ……アあああ！」

嬌声と不整の脈、二つを引き換えに達してしまう。目はしっかりと見開いているが、夜に入ったように視界が真っ暗だ。暗がりのなか、白い星が明滅を繰り返す。だが和奏はまだ達していない。

「僕もイきたいっ！……はあ、はあ。んんっ、くっっ！」

腰を動かすという大振りな動作は、どう頑張っても往復一秒はかかってしまう。だが募る興奮のせいで、体感速度は目にも止まらない速度になった。二人の快感はそれに沿って高まる。

「んあっ、ああんっ、あっああ……ああああ！」

和奏は少女のイキ声をあげ、巨根を女体にねじ込み射精した。女性の外観で、男性的な行為をついに遂行したのである。そのあとも、しばらく居座り続ける性欲を発散させるため、何度か逸物をふるった。

（こめんね、悠里。私、もう貴方じゃイけそうにない）

不潔な行為に甘んじながら、葉は心の中で謝った。この素晴らしい男根を味わったいま、夫とセックスなんて、おかしくて出来ない。たとえ演技でもあげない。そういう身体にされてしまった。

悠里が和奏にもらった薬は、今回は一週間分だった。飲み続けると、肉体変化がさらに進行した。昼も夜もブラジャーをつけているため、胸の形は美しく整っている。乳輪は少し大きくなり、感度も上がった。対してペニスは弱くなり、子種が作れないひ弱なシロモノとなった。まだかうじて勃起はできるが、向きが変わるだけで大きさはほとんど変化しない。手の大きさと陰茎の大きさが合わないため、立ち小便が難しくなった。シヨタサイズの男根を隠したい心情もあり、排尿時も排便時も、大の便器を使うようになった。女性と同じ行動といえる。

身体も行動も、限りなく女性に近づいた。それでも、まだ悠里は男性だった。転機が訪れたのは、新たにもらった薬がなくなった後だ。和奏を往訪すると、彼女の父親がいた。娘である和奏に男根をつけた変態である。

マッドサイエンティストのようなその男に、悠里は睾丸の片方を摘出された。それから、いつもの薬と、痛み止めを一週間分渡された。それが終わってまた訪ねると、反対側の睾丸も取られた。その次は、男のシンボルである男根を切られた。そのまた次は膣を設けられた。

これらの手術を、悠里は大人しく受けた。遥香の命令があつたのだ。

「ゆりは女の子になるんだよ。その方が似合うし、可愛いもん。……え、お金？ 大丈夫だよ。」

知らないって。その代わり、和奏ちゃんとお父さんの言うこと、ちゃんと聞いてね」

言葉通り、金は取られなかった。その代わり、和奏にアナルセックスを求められた。悠里は求められるまま、彼女に身体を差し出した。

最後、性器の形を整える美容整形を行い、手術の全過程が終了した。もう射精はできない。そのかわり、男を受け入れる専用口がある。

変わった体が気になって、悠里は思春期よろしく、暇を見つけては性的な妄想に浸るようになった。相手は遥香だったり和奏だったり、通りすがりや、架空の人物だったりした。相手が誰でも、悠里は「犯される」側だった。

いやらしい空想に浸りつつ、悠里は「女じゃなくて、牝になったようだ」と自嘲した。

手術後も、和奏や遥香とは定期的にプレイを行った。着衣セックスに緊縛、ぶっかけ、生ハメにパイプ、ローター。誰にも知られたくない秘密を次々とうちたてた。荒ぶる快感にもてあそばされ、悠里は幸せだった。だが一つ不届があった。膣を触ってもらえないのだ。

自慰は禁じられていなかったの、何度も「やろう」と考えた。だが怖くて出来なかった。妄想ばかりが加速する。

（ペニバンでもパイプでもいいから、犯されたい）

アナルを犯されるたび、膣をきゅん締めさせた。反面、怖いから嫌だとも思った。相反する欲求に心が揺れる。それは性別の面でも同じだった。

悠里の身体は、今は女性だ。遥香からの扱いもそれである。しかし毎朝、メンズスーツに身を包んで出勤する。会社の中でも取引先からも、完全に「男」として扱われる。

『自分は、男装して働いている女性だ』

そんなふうに考えることにした。だがこれにも問題がある。前述のように、膣への挿入がされないのだ。だから「女」ではなく「女？」という、疑問刑でしか己をつかめない。

セックスは性のすべてではない。頭では分かっていた。だが感情は納得しない。経産セックスを受けることが、悠里の夢となった。そうすれば自分が何者かはつきりする。自分が女であることに自身もてる。男のフリをした女性として生活できる。そしてついに、処女を捨てられる日がやってきた。

悠里は自宅のソファに座り、何気なく窓の外をながめていた。抜けるような広い空に、赤いトンボが幾匹も飛び交っている。つながるトンボをうらやむという、マセガキのようなナンセンスを持っていた。葉はおらず、家には遥香がいるのみ。その彼女に、急に「客を取れ」と命じられた。

「客って？」

すぐには分からず聞き返す。

「男の子だよ。私の同級生。ゆり、若い子好きでしょ？」

悠里は一瞬ほかんとした。ややあつて意味を理解し、そんな、と声をあげた。

（売春しろと言うのか！）

心の中では怒鳴ったが、實際口に出たのは「売春なの？」という柔らかい声だった。どんな突拍子もないことを言われても、遥香が相手なら怒声は抑える。習慣、いや性質として染みついている。

「お金はもらわないから、売春にはならないよ。強いていうなら、フリーセックスかな。もう声はかけてあるんだ。三人も集まったよ。……ゆり、モテモテだね。妬いちゃう」

彼女は人工的に口の端を釣りあげる。見事なまでの作り笑いだ。やはりお前は女なのだ、メスとして生きるのがお似合いだと、悠里に暗に言っている。

「明後日、△△公園に午後十一時集合だよ。私もついていくからね」

拒否権は、はなからなかった。悠里は「はい」と返事をして従うしかない。

正直、どうしたものかと思った。少女は好きだが少年には興味がない。

悠里の中にしぶとく居座る「男性」の心が拒絶を叫ぶ。対して、女体化と共に発達してきた女性の心（正確には「牝」の心）は、楽しみではないと言っている。

（奪われるんだ。ついに、処女を）

女になれる。そう思うと喉が鳴った。ただ、知らない人間を相手にするのは怖かった。初めてなのだから、相手を選んで行いたい。場所だって吟味したい。が、それを無視され、年下のガキにパコられるのもやぶさかではない。

そして迎えた性行当日。悠里は、遥香のものである口学生の服を着て、彼女とともに、指定の公園におもむいた。暗闇のせいで遊具の輪郭はぼやけ、一帯は夜特有の沈んだ空気に包まれている。昼間とはまったく雰囲気違った。不規則に点滅する街灯がいかにも怪しい。その下に、相手となる少年がいた。悠里は彼らを見た瞬間、明かりに引き寄せられる蛾を連想した。

相手は三人いた。ニヤついた笑いを浮かべる黒メガネの少年が一人。こげ茶色の髪をし、ピアス穴を持つ者が一人。残る一人は「田中太郎」といった感じの、普通の少年だ。

「アンタがゆりちゃん？　へー、可愛いねエ。オレ、カズトって言うんだ。よろしく」

茶髪の子が言った。喋り方はちゃらく、風俗の客引きを思わせる。性欲がなかなか強そうだ。

「このメガネは継樹（けいき）。名字はめんどくさいんで略。コッチは篠田（しのだ）だ。ヨロシク」

田中じゃなくて篠田だったか、と、かなりどうでもいいことを悠里は思った。

三人により、悠里は公衆便所の男子側、大使用の個室に引っ張り込まれた。この便所は比較的新しく、広めに作られているが、四人もいるとさすがに狭い。

遥香を含めれば五人のはずだが、彼女はどこかにいなくなった。

「ゆり、元は男なんだっけ？」

メガネの少年こと継樹が、悠里のスカートをめくりながら言った。早口で荒っぽい口調だ。乱暴な腰ふりで無茶なガン突きしてきそうだった。

「正直、あんまり期待してなかった。でも……へえ。お尻、綺麗だな」

悠里は遥香のお下がりの、ストライプ模様の綿ショーツを身に着けていた。

下着ごしに、彼は悠里の尻をてのひらで触る。獲物を物色する、生々しい手付きだった。不安と期待で、悠里の胸は高鳴った。その胸を、篠田につかまれた。

「おっぱい、結構あるね。男だったなんて、言われなきゃわかんないよ」

他二人に比べると柔らかな物言いだ。触り方も優しい。

（胸なら、もっと激しくいじられてもいい）

ねだるうか、と思った。だがその前に質問をされた。

「ゆりちゃん。セックスは初めて？」

「バカ。そんな聞き方したら、うんって言われるに決まってるんだろ」

こいつ元は男だぞ、と継樹が突っ込む。

「こういう奴には、こう聞くんだ。……性経験を教えろよ」

彼は質問を、答えをすべてこつちに投げるものに変えた。悠里は、どうしようか本気で考えた。はい・いいえで回答できない。

真面目に答える義理はなかった。だが悠里の口は勝手に、子作り経験やアナルセックスについて白状した。彼女のペニバンにガチ掘りされて射精したことを話すと、彼らは動物園の猿みたいな仕草で喜んだ。

「で？ 他には何をやったの？」

カズトが身を乗り出して尋ねた。一拍間をおいて、悠里はいやらしい口を開く。

「ふたなりの女の子とセックスしました。白いワンピースを着て……女装しながら、アナルファックされました。大きすぎるチンポで、お尻の穴をいっぱい可愛がってもらって、それで……」包み隠さず語りつつ、悠里は心の中で頭を抱える。

（オレは何を語っているんだ?! こんなこと、女だって言わないだろうに）

娘と同年の男性に、自分の性経験を赤裸々に語る……社会的な抹殺をされかねない非道徳行為だ。罪の意識に至福を得る。セックスを要求して濡れていた膣から淫液がこぼれ、下着をこえて太腿を汚した。

ひとしきり話が終わると、カズトが便座のフタの上に座った。悠里は腕を引っ張られ、彼の胸に顔をうずめた。厚みのあまりない、ごく一般的な男性の身体だった。何の感動も覚えなかったが、若いオス特有の、はつらつとした汗のにおいが鼻をついて身震いが出た。

（乱暴にされるんだらうな）

相手は三人だ。尊厳ごと身体をねじ伏せるような、質の低い乱暴セックスが予感できた。

「じゃあ始めようか」

継樹に下着を下げられ、丸出しになった恥部に指を忍ばされた。前戯のつもりらしいが、やはり粗暴だ。いきなり二本も挿入してきたし、早い間隔で出し入れする。やりたくてたまらない様子がうかがえる。

「んうっ……ああ、ひっ、ん……あ、ああッ、やだ。早すぎる……っ。やだっ、ダメ。止めてえ」抗議の声は催促と表裏一体だ。言葉とは逆に、悠里はカズトの胸に上半身をすりよせ、交尾を求めて尻を突き出した。

新たに一本、指が追加された。これは篠田の指だ。初めはゆっくりだったが、継樹につられたらしく、すぐに性急になった。二本、三本と本数も増える。

「ああっ……ん、いあッ。お……あ、だめっ。ああっ、いやあッ」

二人あわせて、合計で六本となった。敏感な壁をしゃにむにこすられる。悠里の喉は、女性の嬌声をつき出した。それを助長するように、カズトが上半身を襲ってくる。

彼は制服の下から中に入手を入れ、手探りでブラジャーをずらした。ぶるんと飛び出たふくよかな乳房を、ハアハアというエロ息を出しながら犯す。カズトはやや前傾姿勢になっていたが、それでもはっきり分かるほど、ズボンの前が張っていた。

悠里の頭にフェラチオの記憶が蘇った。見ていると口の中に唾がたまる。後ろのペニスには犯されたいし、前のペニスは舐めまわしたい。牝の本能だ。

「物欲しそうな顔してんなア。ゆりちゃん、チンポ欲しい？」

下品な問いに、悠里は期待をまじえて「はい」と言う。

「ぶはっ、マジかよ。アンタ元は男だろ？ 男のくせに他人のチンポしゃぶりたいとか、クソ変態じゃん」

カズトは酷薄に事実を述べる。自尊心をえぐられて、悠里は頬を赤くした。

「いいよ、ほら舐めろ。齒アたてるなよ」

彼が腰を突き出してきた。服はそのままだ。

悠里は相手のズボンのチャックを開け、宝物を扱うように慎重にペニスを取り出した。逸物は、射精の欲求も露わに、ガチガチに硬直している。肌よりずっと色が濃く、下劣なたくましさであふれている。和奏のペニスよりいくらか小さいが、彼女が大きすぎるだけで、サイズとしては標準だろう。受精欲あふれた粗野さがあつた。

昔の悠里なら、嫌悪感を心に満ちた。今は尻尾を振らんばかりに飛びついてしまう。

顔を近づけると、ひととき濃いオスの臭いが鼻をつく。亀頭にキスを落とす、裏筋に舌をはわせた。何度か舌先を往復させると、先端がだらしなく発露しはじめた。

先走りは興奮の証だ。自分の奉仕で高みに上がってもらえることに、悠里は、牝の悦びを感じていた。

「はあっ、はあ……ん。じゅるっ。はあ、んふっ……あ、あ」

目にハートを浮かべながら、頬に相手を含む。汗と尿と脂を飲み込み、代わりに唾液をねだくつた。相手を自分の味に変えてゆく。だが彼が射精すれば、すべてまた、彼の味に変わるのだ。

この間も、男子二人による淫への愛玩は続いていた。悠里にとって、初めてのワグナ愛撫である。牝の身体は感涙していた。わずかだった湿り気がトロミを増やし、指が引き抜かれるたび愛液を下に飛び散らせる。触られなくてもGスポットが震えてしまう。

「もう挿れてもいいよな？」

待ちきれないというように継樹が言う。質問、あるいは許可をとる風の口ぶりだったが、彼は誰の返事も待つことなく、いきなり挿入に入った。

「ひっ！ あ……ああ、痛っ、うううっ」

「お、暖かい。はあ……んッ。あー、狭い！」

慣らされたとはいえ、悠里は未経験で、雌穴は繊細だ。少しずつ挿入し、慣らすのが本来の筋である。少年はそこを、己が気持ちよくなるためだけに蹂躪した。

「んんいッ！ あっ、ああ……まつ、待って。や……ッ、いああッ！」

ビンビンに怒張した若いペニスに、処女を一気に摘み取られる。衝撃に、悠里は危うくカズトを噛みそうになった。

彼に不服の声をあげられたが、悠里は、しゃぶっていたペニスを口から吐き出した。肉の薄い胸板にしがみつき、ひいひいと悲鳴をあげてしまう。

（いだいっ！ 痛い痛い痛い！ 嘘だろ、こんな……ッ、痛いなんてえ！）

自然と、後ろの彼から逃げる姿勢を取ってしまう。身体はどんどん前倒しになり、気がつけば悠里は、カズトの首を抱いていた。彼は、唾液で濡れたペニスを揺らしながら、まんざらでもない顔をしていた。

（男に犯されながら、男に抱きついていて。こんな同性のすることじゃない。オレは、やっぱり牝なんだ）

継樹の強欲ペニスは最奥を求め、狭い腔を無理やり拡張し、奥へと進む。処女膜を裂かれ、血が一条、垂れて太腿に伝った。それ以上に、悠里は口の端から涎を垂らしていた。幾筋も重ね、カズトの服を濡らしてしまう。汚すなど怒られたが、止められない。

「あのさ……僕のこと忘れてない？」

視界の端に篠田が映った。彼はいつの間にか下半身の着衣を取っていた。股間にあるものが丸見えになっている。

チラッと見て、悠里は、犯されていることを忘れるほどぎょっとした。和奏と同じくらいの巨根がそびえていた。外見と股間のギャップが激しい。思わず見とれた。

「オイ、浮気すんじゃねーよ」

カズトが苦笑交じりで声をかけてきた。

「ソッチ見ないでオレのを見ろよ。ほら、続きだ。しゃぶれ」

頭をつかまれ、顔を下げられた。悠里は再び、少年の勃起物を啜えた。

先端をばくりと啜えた直後、後ろのペニスが腔の最奥に到達した。

「んふううッ！」

内臓に、撃たれたような衝撃が走る。継樹はスカートごと悠里の尻をがっしりつかまえ、中を確かめるように、小刻みのリズムでペニスを前後させていた。尻に指が食い込んで痛かったが、破瓜のヒリつきに比べたら何てことない。

下半身の痛みに涙腺を刺激され、悠里はぼろぼろと涙をこぼしていた。大の大人が、こんなことで泣かされるとは思わなかった。頬を伝う雫がしゃぶっているペニスに垂れ、肉棒に苦さを追加した。

ふいに、右手首をぐっとつかまれた。

「ね、触ってよ」

手に、馴染みのある感触が走る。男根だ。硬いが柔軟性があり、肌になじむ温かさだ。

「はふ、お……ん、はあつ、はあ……じゅるっ。おほっ、おはあつ、はあ、はふうっ」

体の前後をベニスに串刺しされながら、悠里は篠田に手コキをほどこした。遥香たちに色々「調教」はされてきたが、三本を相手にするのは初めてだ。手はどうしてもぎこちなくなる。悠里と同年代の男なら、あまり満足しなかっただろう。だが篠田には良かったようだ。嬉しそうな声をあげている。その声に混じり、此処にいる四人の誰でもない声が聞こえてきた。

(え？ どこから……？)

隣の壁からだ。今いる個室は男子トイレの一番端で、隣は女子トイレである。話し声だと思っただが、よくよく聞けば全く違う。あきらかに性的な声だ。

板が厚いのか、声はかなりくぐもって聞こえる。それでも、男女の営み音がはっきり耳を打ってきた。此処は夜の公園だし、金のない若いカップルあたりが、ラブホ代わりに使っているのだろう。

隣でもセックスをしている……この事実が、悠里の淫欲に火をつけた。皮剥き運動のように手を往復させながら、悠里は、彼のベニスが自分の乳房に当たろうと誘った。篠田もそれに応え、積極的に腰を突き出してくれた。彼が悠里に近づくには、便器や、真ん前にいるカストの身体が障害になった。だが逸物が大きいので、最終的にはうまく届いた。

「んっ、あふっ……お、んうっ。はおおッ」

巨根の亀頭が、胸の突起にびたりと当たる。先端のワレメに悠里の乳首は飲み込まれた。篠田が腰を振りはじめたので、悠里は乳房を、ベニスにつつかれる格好となった。

柔らかな乳房を男根につぶされるたび、悠里は、自分は女性であるという意識を強めた。男の胸板では、こんな芸当はできない。

(三本のチンポで犯されるなんて。男の時では味わえなかった幸せだ。膣も犯されて、おっぱいを潰されて……ああ、たまらない！)

牝化意識の高まりには他二つのベニスも寄与している。男の時なら、口の中に射精寸前のペニスがガン勃ちすることを許さなかった。膣に男性器を受け、処女膜を裂かれ、痛みと快感に揺さぶられることもなかった。

(オレは牝だ。男の言いなりになるエロい獣だ。男性の……チンポ様の……性欲処理具っ)

最初こそ痛いばかりだった女性器へのファックも、今は慣れて、気持ちよさが勝るようになってきた。継樹が腰を前後させるたび、歓喜の悲鳴が出そうになる。フェラチオしていなければ盛大にあえいでいただろう。欲望を全肯定した青臭い摩羅にズコズコ犯され、こんな幸福を味わえる……自分を新発見した気分になった。死ぬ間際にも思い出しそうだ。

牝としての墮落が板につくにつれ、悠里は、どのベニスに意識を向ければいいのか分からなくなった。口も手(乳首)も膣もすべて気になって散漫になる。そのうち、もともと強い刺激をくれたベニスに心を取られるようになった。反射に頼った反応は、単細胞生物と同じだ。

「あー、やば……イク！」

声変わりが済んだばかりの若い喉で、継樹は短く絶頂を叫んだ。そのまま、中に射精する。悠里の処女はこれで完全に汚された。

熱い汚濁を受けながら、悠里はうっとり涙を流した。大半は感激によるものだった。でも、まだほんのすこし、後悔と屈辱が混じっていた。

「次、僕がやる」

手の中から篠田が抜け出た。狭い空間を器用に移動し、彼と継樹は位置を交換する。役目を終えた継樹は萎えていたので、乳房には届かなかった。だが芯には熱がこもっている。少し経てばまた勃起するだろう。

「休んでんじゃねーぞ」

カストに髪をつかまれ、力任せに顔を上下させられた。意思とは無関係な運動に息がつまった。喉の奥を何度もつつかれ、息苦しい反射も出る。性行為という、酸素消費のはなはだしい運動をしているのに、肺に十分な空気を送れない。呼吸のタイミングを、完全にペニスに握られた。

「ングっ！ お……が、んあ……ぐえっ。おこっ、おほおっ」

破瓜を終え、悠里の中はほぐれている。しかし相手は巨根だ。広げられたはずの膈壁がさらに大きく広げられ、気持ちよい世界に連れて行かれる。力強くて重々しい。他人の精を自分のそれに置き換える気満々だ。

「ゆりちゃん、本当に男だったの？ おまんこ、めっちゃ気持ちいいよ！」

女子口学生みたいな甲高い声で、彼は喜びを爆発させる。パンッパンッという音が鳴り響いた。トイレの外にも聞こえるだろう。もちろん、壁の向こうの誰かさんにも。だが、あつちはあつちで佳境に入っているようだ。壁こしでも、あんあん鳴いているのが分かる。

「……あゝ。ヤベエ。イクっ。あ……ッううう！ 離れろ！」

髪をつかむカストの手に、いつそう力が入った。首がグキツとなるほど上を向かされ、悠里はがはつと息を吐いた。ペニスを離しながら、大きく口を開けてしまう。刹那、白い火花を見た。あ、と思ったときには既に、顔に、卵の白身みたいなドロツとした生臭い液がかかっていた。いくらか口の中に入り、独特の青臭さを味わった。

「ゆりちゃん、オレの服をクソ汚しただろ？ そのお返し」

呆けた、アホくさい面でカストは笑った。それ以上に、悠里はまぬけた顔をさらした。オス液という穢れをぬぐうこともせず、あつあつと声をあげ、ひたすら下半身の享楽に身を任せる。(ぎもぢい。チンポに蹂躪されるのが、こんなに良いなんて)

悠里は、あたかも呼吸するように、自然に手コキを行っていた。真正のド淫乱だ。どんな男根も選り好みせずフリーパスで受け取るビッチだ。全身で男性にご奉仕し、それ以外なにも考えない。公衆便所にいるにふさわしい体たらくだ。

「ふいっ。はあはあ、あつ……ん、おおっ。勃起チンポっ……ぎもぢ、い……イ！」

巨根の案内で、牝化した体はいやらしい高みに上がり、潮吹きのカウントダウンを初めてしまう。ワレメはいよいよびちょ濡れとなり、クリトリスはギン勃ちした。

「んああつ、あつ……おおっ！ あつ、あんっ。はあつ……ああつ。ああア、あ……ッ!!」

ついに悠里は最高潮に達した。年下の男性三人に囲まれ、部屋ですらない便所の中、輪姦されて潮を吹く。惜しげもなく淫乱エキスを大放出し、狭い個室内に水の音を響かせた。

悠里が達したことを知って、三人は喜んだ。篠田はますますサカって交尾に忙しめ、トランスがかった狂乱で抜き出しを繰り返す。その最中に、『あつあつああッ……はっ、んあああーッ!!』

隣から、女性の激しいイキ声が響き、壁がビリビリとうなった。追い打ちをかけるように、少女と思われる笑い声が響く。



夢見がちな頭で、悠里は嘲笑の主を悟った。遥香だ。だが、あえぎ声は彼女ではない。和奏でもないようだ。知らない人だと思いが、妙に聞き覚えを感じる。

「ゆりちゃん……ッ、はあッ、おおッ！ あッ、はあッ、あああッ！」

肉欲で分別を失った少年は、獣化した知性そのまま精を破裂させた。悠里の奥に、どぶつと精液を注ぎこむ。徳の精子が、前に出された精子と混じり合う。

（膣の中で、精液のミックスが作られている！ やっぱ私は牝なんだ。男達の性欲を発散させる公衆便所！）

悠里の中で、ふしだらな感情が爆発する。今なら誰とでも、何回でもやれると思った。ぶっかけられた精液の臭いが、顔にまとわりつくことすら心地よい。

三人のうちの誰かに、身体をぐるりとひっくり返された。悠里は仰向けになり、便座のフタに座る姿勢となった。ずっとカズトが腰かけていたため、やたら温かった。

「じゃあ次はオレな。ゆりちゃん、オレのちんぽのお世話ヨロシク！」

カズトがするりと抜け出た。一度目の射精で収まった性欲はまた復活していて、ギチギチに張りつめた若いペニスが悠里の股間に向いている。

三度目の挿入。ついさっき脱・処女をしかかりの身体には辛い……はずだが、悠里の牝穴は大喜びで慰安をほどこす。目の前にペニスをぶら下げられれば、腰を振って迎えてしまう。コンドームなし、生身の直球とあらば、なおさらだ。

「おっ、んおおッ！」

ズウンと激しい凸を喰らい、悠里は大きくのけぞった。その口にペニスを突っ込まれた。一本ではない、二本だ。

「一度に二本、イケるかな？」

「こいつ淫乱だからイケるだろ。おら、しゃぶれ」

篠田と継樹だ。彼らは上向きペニスを強引に下向かせ、悠里の口を穢そうとしている。

「んほおお、も……お、はふおッ、おほッ、お……おおッ」

性行為済みの汚れたペニスを、悠里は喜んでしゃぶった。間接的に、己の膣を味わってしまう。確かに「女」の味がした。

（この子達に、私は牝として目覚めさせてもらった。だからしっかりと奉仕して、恩返ししなきゃ）

悠里の太腿に垂れていた血は、愛液と少年たちの精液で、いつしかやむやに消えていた。

三人の少年は性欲旺盛で、悠里は明け方近くまで延々と犯され続けた。膣だけでなく尻穴も犯され、二穴ファックもされた。悠里の二つの穴はぽっかり開き、明け方の冷えた空気の中、湯気がたつほどになった。

「じゃあ、これでお開きってことで」

篠田が巨根を膣からずりと引き抜くと、カズトも、射精済みペニスをアナルから引き抜く。

「さすがに眠いなア。家に帰って寝るか」

「ゆり。お前はもう用済みだ。バレるとやばいから、早く帰れ」

悠里は個室の外に放り出された。だが腰がガクガクして満足に歩けなかった。やむなく公園の藪に潜んだ。

下手人の少年達はすぐには帰らず、トイレの入り口でダベっていた。姿は見えないが声が聞こえる。

「とりあえず満足はできたけどさア、やっぱりオレ、生粋の女の方が良かった」

カズトの声だ。

「ソッチをやればよかったな」

「何言ってるんだ」

知らない声が答える。年頃はカズトと同じくらい。

「こっちはただの女だぞ。その辺にいくらでもいる。珍しくない。しかも一穴二本ファックとかさせられた」

「でも美人だったろ？ 名前は何だっけ。えーと……」

「俺はゆりが良かった」

カズトを避けて、知らない声がまた叫ぶ。

「ゆりは元・男だろ？ 男が気持ちよくなるポイントを知りまくっているってことじゃん。……」

あーあ、何で自分、普通の女を選んじゃったんだらう」

「それな。ホモ臭いって思っちゃったんだよな」

「実際そうだぞ」

この早口は継樹だ。

「マンコもオッパイもあって、顔も綺麗だがやっぱり男だ」

地面に唾を吐く音がする。

「俺、あっちの趣味はないからさ。途中で何度かゆりの正体思いだして萎えかけた」

「よく言うよ。あんなに出しまくっていたくせに」

キャツキャツと、年若い者にこそ許されるトーンで篠田が笑う。

「だけど僕も女の方が良かった」

「俺達はゆりが良かった」

「途中で交換してみればよかった」

「そうだなア」

少年たちは笑いあいながらいなくなる。下馬評の声が遠ざかり、早起きスズメのさえずりに変わっていく。

（そうだ。遥香はどこにいったんだらう）

ガクつく足腰を叱咤し、悠里は藪から立ち上がった。同じタイミングで、女子トイレから遥香がやってきた。誰か女性を抱えている。女子口学生の服を着ているが、大人のようだ。うつむいているので顔は分らない。

（あの人が、あえぎ声の主か。カズト君たちが僕と比較した人……）

あっちが良かった、という容赦ない言葉を思い出す。

（やっぱり、本物の女性には敵わないのかな）

悠里は胸の上で手をぎゅっと握りしめた。犯されまくり、昨日より開いてしまった膣がわなな

く。比較された上、けなされた。悲しくて、惨めで……でも、とてもソクソクした。これ以上すこ

第十一章 寝取られ

「え、何で……？」

目の前の光景に、悠里は目を疑った。

そこは夫婦の寝室だ。狭い部屋に無理に入れたダブルベッドが、空間いっぱいに占拠している。窓のカーテンは完全に締めてあった。今は夜なので、外から漏れる陽光はなく、部屋は暗い。ルームライトだけがぼんやり光っていた。

この部屋に居るのは葉だけ。そう思ってたのだが、なんと和奏もいた。二人は裸で絡みあっており、周りには、精液の入ったコンドームが三つも落ちて居る。ピンクに緑、黄色とやけにカラフルだ。性的な匂いがむせるほど充満していた。

「ゆりちゃん、今日も可愛いね。その服とっても似合ってる」

葉の足を持ち上げ、巨根をハメ込みながら和奏は言う。悠里は今の自分の服装を思い出した。ピンク色を基調としたフリルたっぷりのミニ丈ワンピースだ。

驚愕は本来、葉のものになるはずだった。悠里は頭をフル回転させ、此処に来るまでの経緯を思い出した。

（仕事が終わって帰宅して、遥香にワンピースを渡されて……）

着替えるよう命じられた。それに従ったあと、彼女はこう言った。

『その身体、隠すのはもう無理でしょう？ 女になったことをママにカミングアウトしよう。予防線は張っておいたから、あまり驚かれないと思うよ。ママは寝室にいるから、行ってきた』で、訪れた結果がこれだ。

「な、なんで？ どうして葉と、和奏が……」

「ごめんね。実は僕、葉ちゃんとセックスしてたんだ」

ちょっと前からね、と和奏は言う。

「お互い、相性が良くてさ。……んっ、はあ……あ、出るっ。葉ちゃん、もう一回出すよっ！」

「はひい！ 出してくださいっ、出して出してえ！ んっ……お、おとおお！ すごいつ、もう四回目なのに、ゴムにしても射精液がビュービュー出てるの分かっちゃう！ はあんっ、すごーい。こんなの味わったら、もう普通のチンポなんて啜えられない」

「あははっ、そっか。じゃあ今度は、ゴムなしでしようか」

「んっ、ありがとうございます、お願いします！」

「本当にいいの？ 旦那さんがそこで見ているけど」

「いいんです。私は貴方のオナホなんです。どうか精液便所としてコキ使ってくださいっ。誰より貴方を……貴方のチンポを優先します!!」

「彼のチンチンより、僕のチンチンの方が気持ちいい？」

和奏の質問は、明らかに、答えが分かかっていて尋ねたものだった。果たして葉は、全力で頷いた。

「貴方の……大きくてたくましいふたなりチンポじゃないと満足できませんっ」

「えへ。気に入ってもらえて嬉しいよ」

和奏は葉からペニスを抜いた。緑色のゴムをつけていて、ペニス自体が着色されたように見える。彼女は慣れた手付きでコンドームを外し、結んで悠里の方へ投げた。先端が精液で膨らんだそれは、もぎとられたウツボカズラのようなだった。

中に入っているのは、一回分の精液のはず。しかし、一般男性の三回分以上ある。おそらく、これをしつかり見せつけるために、ゴムをつけていたのだろう。

（こんなの、見せられたら）

ドクドクと脈打つペニス、中出しされるほどばしり……牝が受ける幸福が回帰される。

「はあんっ！ あっ、あああ、すごい、イイっ。さっきのもすごく良かったけど……やっぱり生が最高ですっ。デカすぎるふたなりペニスが私のこと掘削して……奥にチュッチュって吸い付いてる！ こんな凄いセックスがあるなんて信じられない！ 生きて良かったあ♪」

悠里はぎゅっと手を握りしめた。何か言いたい、何かやりたい。でも思いつかない。

（オレ、どうしたらいいんだ？）

妻の浮気はショックだ。だが冷静に考えれば、自分の方がよほどショッキングなことをしてかしている。彼女はただ和奏とセックスしているだけだ。しかし自分は、彼女とも、娘ともセックスをした。会ったばかりの少年達とも身体を交わした。何より……女性の肉体となった。男として彼女を満足させることは、もうできない。

（攻められない。葉を非難できない）

悠里に見せつけるように、和奏はぐぼぐぼと卑猥な運動を繰り返す。巨根を彼女の中で反復させる。やっているのは単純な動作だ。頭を使う必要がない。だから獣の衝動が加速する。勢いを緩めない征矢に絶えきれず、葉は誘い水をほとばしらせた。

「はあっ……あんっ。ああ、イっちゃった……ア」

激しいアクメを迎えた彼女に、悠里は恐る恐る尋ねた。

「気持ちいい？」

「はいっ、気持ちいいです！ 最高ですっ！」

開放的すぎる、だらしない笑顔で葉は言う。ですます口調は、彼女が和奏に話するときと同じだ。いま問いかけた人間が誰なのか、葉は分かっているのだろう。無視されたも同然だ。どんな侮辱をかけられるより心にこたえた。

「ああ……イくっ。旦那さんの目の前で、葉ちゃんに中出しイ！」

卑猥な前後運動でたくわえた快感エネルギーを、和奏は一気に放出した。既婚女性の子宮に遠慮なく精を注ぎ、はあゝと満足げな息を吐く。だがまだ抜かない。生涯最後のセックスを果たそうとしているような強欲さで、葉をむさぼり続ける。

「そうだ。ゆりちゃん、何か用事があって此処に来たんじゃないの？」

「あ……はい」

悠里は、自分が女になったことを、ボソボソとした声で話した。絶頂の高波から解放されていた葉は、一応、聞いたし理解もしてくれた。が、返事は「ああ、そう」の一言だった。何の感情も含まれていなかった。

「それだけ？」

「こめんなさい。私、貴方とセックスする気、ないから」



葉の声には、罪悪感が含まれていた。さっきの無感情な一言は、気持ちをすべて押し殺したゆえの返事だったかもしれない。

彼女は絶望的な、それでいて淫らな顔でこう続けた。

「和奏ちゃんや遥香が喜べば、それでいい」

「遥香？　なんで遥香が出てくるんだ」

「今日、僕をこの部屋に入れたのは遥香ちゃんだからね」

場違いな、綺麗な笑顔を和奏は見せる。

「遥香ちゃんはいいい子だよ。最高の友達だよ。ゆりちゃんにとってもそうでしょう？」

「それは……」

「ゆりちゃん、この前、公衆トイレで男の子三人とセックスしたでしょ。そのとき、葉ちゃんが隣にいたんだよ。遥香ちゃんの手引きでね」

あのとき、遥香が自分の元からいなくなったことを思い出した。そして、隣の便所から彼女の笑い声が聞こえたことも。

（遥香は、葉を同級生に犯させて笑っていたのか）

父親である自分だけでなく、母親である葉まで堕とすなんて。鬼畜すぎる。

どうしてこんな風になったのか。今更ながら、頭が痛くなった。

「でも、相手は普通サイズのチンポだったらしくて。葉ちゃん、いまいち満足できなかったみたい。陰に二本同時挿入してもらって、ようやくイケたんだって」

「そんな」

シヨックの上にシヨックが重なる。自分の妻が、そんな淫らなユルマンになったなんて。

「葉ちゃんはデカ摩羅でしかイケないガバガバまんこで、悠里ちゃんはどうなチンポでも即ウエルカムな牝堕ち男。お似合いだよな？　というわけで」

和奏は背筋をぐっと伸ばした。葉が目を見開く。

「んうっ、嘘……また大きくなって?！」

「五回目いくよ」

「あっ！　ああっ、んっ、いやっ、動かれたら……あああ、またイっちゃいますっ！　あああ、あ……なたっ」

この時、初めて葉は悠里をまっすぐ見た。

「ごめんなさい、ごめんなさい！　こんなつもりじゃなかったの。私はただ、貴方が浮気しているんじゃないかと思って、それで……おほおっ！　あひっうっ、おんっ、はあっ、あっああ、ああああー!!」

通算で何度目になるかわからないピドーを彼女は迎える。次いで和奏が、雄牛のような息を吐いてペニスを抜いた。ローションに浸けたように濡れたペニスをむき出しに、葉の腹の上で射精する。

「んああっ、そんな。中に出してほしかったのに」

葉が残念そうな声をあげた。和奏は「大丈夫だよ」と言って、逸物を手でこすりはじめた。

「またすぐ勃起できるから。ん……はあ、ふっ。あゝ。ほら見て。またチンポ膨らんできたよ。へへへ、すごいでしょ」

「はあつ、すごい。絶倫すぎる！ 私、壊されちゃう。でも和奏ちゃんになら、壊されてもいいっ！」

「じゃあ、もう一回挿れるよ」

性欲の象徴が、再び菜に戻っていく。淫らな音の饗宴が再開した。

悠里は悲哀を持って二人を見ていた。目の前で妻を他人に犯されるのは、やはり悔しかった。だが「良かった」とも思った。このおかげで、菜は、夫の女体化という事実を、傷つかず受け入れられたのだ。

「夫婦そろって僕のチンポにメロメロなんて、どスケベだね。だから遥香ちゃんもエッチなんだ」頭の上から、和奏の音が降ってくる。これだけで見下されている気分になることができ、悠里は体の奥に熱を感じた。そうでなくても今、ムラムラできる材料が目前にある。和奏の男根だ。何度も射精したというのに、また膨らんでいる。暴力的な屹立が止まらない。

冷たい床を正座で温めながら、悠里は葉と並び、彼女のペニスを見上げていた。口は半開きで、走った後の犬のようにハッハッと息を吐いている。完全に「こ奉仕」体勢だ。葉も同じ状態である。

むき出しの和奏のペニスは、セックスを象徴するようなえげつない二オイをまとっている。愛液と精液……生々しい肉欲の香に、ゴムの刺激臭が混じっている。

つけていたあれは安物だったのだろう、と悠里は思った。この化学臭を、一刻も早く自分の舌でぬぐってやりたかった。

舐めていいかと、自ら尋ねた。和奏はわざとらしい逡巡を見せたあと、頷いた。

悠里は喜んでペニスに飛びついた。二オイを嗅ぎながら舌の表面を刀身にあて、下から上に向けて丁寧になぞる。それだけでは足りず、腰を浮かせて先端からばくりと咥え、ごきゅごきゅ音を鳴らして喉の奥に誘いこんだ。咽頭を突かれて嘔吐の反射を誘われたが、飲み込んだ。

(最初の頃に比べると、慣れたなあ)

自分の成長を悠里は自賛する。

ゴムの二オイが口から鼻へ抜けていった。刺激で涙が出そうになる。それを己の味でかき消せるのだと思うと、浅ましい興奮の中に優越感が湧いた。

「あー、気持ちいい」

和奏がうっとりとした声をあげる。言葉は月並みだが、感じているのは本当のようだ。先端からの滴りがそれを証明している。相手を快感に墮とした時のみもらえる、とても貴重なご褒美スープだ。もっともらえよう……熱いほどはしりを喉奥に出してもらえよう、悠里は頬をへこませ、懸命に舌をくねらせる。さらに、勢いよく先端を吸って、尿道に残っていた精液を味わった。

(もっと舐めたい。もっと舐めて、彼女を気持ちよくさせるんだ)

彼女の声から、感じるポイントを探しあてる。先端と裏がイイようだ。そこを重点的に責めた。舌先でつついたり、わずかに前歯を立てたり。表皮を咥えて引っ張り出した。

「ゆりちゃん、僕が気持ちよくなれるところ、一生懸命探してくれるね」

悠里の奉仕を、和奏はしっかり受け取っていた。

「ん……おおつ、いいね、上手だよ。あ……んっ。すごい。本物の女の子顔負けだあ」

「んう。はふッ、はあ、んっくうッはああつ、お……う、ん、あはあッ」

いくら飲んでも、ペニスは胃の中には入らない。ぷりっとしたのどしを、半永久的に味わえる。

「私も、舐めていいですか？」

隣で葉が物欲しげに言う。和奏はいいよと頷いた。

「手は使わないで、口と舌だけで、僕を楽ませて。喧嘩しないで、仲良く分けあって舐めてね」

デカチンポを口から離すのは惜しかったが、分けろと言われては仕方がない。唾液を垂らしながら、悠里は和奏を離れた。葉がおしやぶりするスペースを作ってやる。

葉は嬉しそうに和奏に口をつけた。

「ん……ふう、あふうっ」

悠里がしたように、彼女は舌の表面をペニスの表面にべたりとくっつける。そのまま、小刻みの震えを出した。振動で、肉棒上の汚れをすべて取り除こうとしている。己の唾液でワックスをかけるのも忘れない。

「あはあっ、はあ……和奏ちゃんのおちんぽお。はふ……ペロッ。じゅるうっ。んああ、美味しい。この味、好き」

エロさと必死が折衷した形相は、喜劇役者のようなおかしさがある。だが悠里は、彼女のことを笑えなかった。自分もふたなり巨根がほしいのだ。

負けじと舌をはわせた。わざと音をたてて唾液をすすった。

「はあ……ん。和奏ちゃん、私の舌も味わって。ほら、いっぱいペロペロするからあ」

裏筋を境に右と左、二人の舌がせめぎ合う。怪猫が油を舐めるような、怪しい音がしばらく続いた。

舐めながら、葉は和奏に息を吐きかけはじめた。口だけで相手を良くするには、できることはすべてやらねばならない。これも立派な武器だ。はあ、はあという荒い息は、聞く者すべての聴覚を犯す。おまけに、アダルトチックな加熱をペニスにほどこす。

「んういいッ！ あっ、すごい。それイイっ。あ……気持ちいい」

和奏が甘い声をあげはじめた。悠里も真似して彼女に息を吐きかけ、舐めた。

本当はもう一度、喉の奥に彼女を迎えたかった。あるいは膣、アナルにもらってもいい。相手が和奏でなくてもいい。巨根なら誰でも構わない。

（私、淫乱だ）

牝だな……と思った。昔はさんざん反発したものが、今はこの上なくしつくりくる。

もっと墮落したかった。先日の公園のときのように、公衆便所扱いされたかった。隣にいる妻と一緒にフリーセックスをしまくりたい。

（あの時、壁がなければなあ）

彼女と抱き合い、楽しむ所を想像する。それで悠里は、妻を愛する気持ちをまだ抱いていることに気がついた。

（私、レズの気があるのかな）

そう考えたとき、突然、扉が開いた。

「はーい、こんにちわ！」

遥香がやってきた。ウインクピースサインでもしたら似合いそうな声色だったが、彼女は腰にペニバンをつけていた。歩くと、物騒な凶器が揺れている。和奏は驚かず、こっちこっちと手招きをした。

「遥香ちゃんも来たし、そろそろセックスしようかな。僕、今度はゆりちゃんを犯したいな」

「オッケー。じゃあ葉ちゃんは私が犯すね」

遥香は軽い調子で返事をする。

悠里は葉と並んだまま、ベッドにうつ伏せに寝させられた。幾度となくやっている獣の姿勢。犯される者特有体勢だ。ワンピースを着たまま足を開き、男根を受け入れる体勢を作る。

「葉ちゃんと手をつないで」

手探りで妻の手をさがし、きゅっとつかむ。手を触れあわせるのは久しぶりだ。女性化を知られたくなくて、こんな些細なふれあいすらも避けていたからだ。今となつては、女性となった体を必死になつて隠していた事実が可笑しい。

夫婦仲良く手をつなぎあい、悠里は和奏と、葉は遥香とセックスをする。

「んほおっ！ あっ……ああ、和奏ちゃんのおチンポ凶悪すぎる！ いいい、イぐっ、イっちやう。メスイキするう！」

妻を屈服させたベニスに大事な所を賜られながら、悠里は幸せを連呼していた。葉も同じだ。先の二倍の嬌声が響く。

「あああ！ ダメっ、和奏ちゃんのおちんぼ……やっぱり……激しすぎるっ。体が揺れるっ、ドンドン叩かれてる！ 大事なところゴシゴシされて……あはあっ、ふたなりチンポでアクメいくウ！」

「喋れるくらいなら、まだ余裕だね。ゆりちゃん、もつとメチャメチャになつてよ。無意味を叫ぶだけの存在になつて」

牝に転落したオスまんこを、男性よりも男性らしい摩羅が襲う。雄牛のようなデカさと重量感があるが、一発では終わらず何度でも奥をノックしてくる。ねちつく、とにかくしつこい。何があるかと相手をイカせる、絶対的な陽物だ。それは遥香のペニバンも同じだ。作り物だと侮ることはできない。研究と開発の末に形が決定されたそれは、女をイカせる仕様になっている。下手な生身よりよほど気持ちいい。相手の女の腰を砕かせ、内部をスクスクに濡らせる。

「んいっ……遥香ちゃんのデカちゃんぼっ、私の奥にガンガン当たって……あひっ、おおおっ。イぐっ、いぐうアあああ！ こんなセックスされたらっ、私も妊娠しちゃうよお！」

「あははっ、娘のチンポで妊娠なんて、ママは近親相姦大好きなド変態かな？ 和奏ちゃんのチンポとこれ、どっちがいい？」

「どっちも！ どっちもイイですっ。おっ……あっ、ああ！ ひいひい！ おおお……おがじぐなるっ。イキ狂っちゃう!!」

「あああっ、ぐ……っ、えあアっ、ぞっっ、いいいっ、ぐひいいっ おっ、オシッコ吹いちゃう。潮吹きするう！」

ベッドのスプリングが縦横無尽にはねる。悠里も葉も、互いに、相手が受ける衝撃の一部を自身の体に受けていた。仮にも夫婦……子作りをした仲だ。体の相性は本来、悪くない。悠里がイくと葉も達し、葉が潮を吹くと悠里も漏らす。絶頂に次ぐ絶頂で、終わりが終わらない。

（いひいっ！ これすごイイ！ ああ……そう。これが私の求めていたもの。これが本当のセックス。こうして、メチャメチャに犯されることが、私の生きがい！）

膣内での射精が終わると今度はアナルだ。その次はまた膣に戻る。悠里の二つの穴は、拳すら入りそうなほど拡張し、内部のピンク色を相手に向けてさらしていた。悠里がサカればサカルほど、内部の色づきは良くなり艶が入り、穴は開いて奥を見せる。発情期の猿の尻が赤くなるのと同じ原理かもしれない。だがそれよりずっと淫乱だ。



常識をつむぐ糸はとくに焼ききれていた。今の悠里は、肉棒さえあてがわれていれば満足という、クズみたいなスティックハッピー状態だ。男や女といった分類の下層に位置し、脈拍をあげながら股を開く狂態を見せる。

気がつくと、悠里は遥香に犯されていた。攻め手が交代したことすら気が付かなかった。たとえ相手が、家に押し入ってきた強盗でも気にしない。ひたすら、いやらしいアクメを迎えるだけだ。

このまま体内ノックが続いていたら、悠里も葉も気を失っていた。だがそうなる前……一段落ついた頃、遥香がある提案をした。

「お互いの秘密もなくなったことだし、仲直りのデートをしたら？ 私の制服、貸してあげる。これを着て、いってきてよ」

仲が壊れていないのに「仲直り」というのも奇妙な話だ。が、悠里はいつものように、はいと返事をして従った。葉は少し迷っていたが、和奏に背中を押されて制服を着た。

「あー、もうこんな時間だ。夜景が綺麗な時間帯だね」

和奏が時計を見上げる。帰らなきゃ、と言い出した。

「ゆりちゃんと葉ちゃんのこと、途中まで送っていくよ」

「じゃ、和奏ちゃんよろしく。私は家で待ってるからね。宿題あるし」

「ほら、二人とも。恥ずかしがらずに顔をあげて。大丈夫、可愛いから」

和奏に背中を押され、大人二人、セーラー襟とスカートをまとい、手をつないで外へ繰り出す。もう辺りは真っ暗で、闇が、年甲斐のない服をまとった肉体を隠してくれた。

（この暗さじゃ顔なんて分らないし、デートにはちょうどいいかも……）

悠里は葉の右手をきゅつと握った。手の柔らかさ、細い指の繊細さに胸が高鳴った。

和奏に付き従われ、悠里と葉は繁華街へ足を向けた。ネオンきらめく街は夜なお明るく、道ゆく人は大人ばかりだ。制服姿は場違いだ。

「じゃ、私はこっちだから」

和奏は途中でいなくなり、悠里は葉と二人、その場に残された。急に心細くなり、悠里は、店の看板が輝く下で、葉の手を強めに握った。彼女も同じように握り返してくれた。体が変わっても、他人と肉体関係を持っても、互いに互いを厭わない。自分達の絆は、普通の夫婦より強いかもしれない……そう、悠里は思った。

「あれ？ こんな時間に口学生か？」

男の声がした。少し離れたところに、若者が数人、ヤンキー座りしている。

「不良少女かよ。二人いるけど、家出？」

「結構かわいいじゃん。声かけてみようか」

彼らは仲間内だけで話しているつもりらしいが、声が大きいので丸聞こえだ。

「ね……行こう」

葉が手を引っ張ってきた。表情は「あんな奴ら興味ない」と語っていた。

悠里はつい、若者たちの股間を見た。勃起状態ではないため正確な判断はできないが、大きなさそうだ。

（それなら、どうでもいい）

歩いていると、道ゆく人にチラチラ見られた。コスプレか？ というささやき声も何度か聞いた。だが誰も、悠里がもと女性であること、隣の女性と夫婦であることには気づかない。悠里は解放感を覚えはじめた。男なのに……と、ビクビクしながら体を隠していた頃が嘘のようだ。さらにもう一つ。葉に手を引かれることに、違和感がなくなった。

手をつないで歩くことは、もうずっとしていなかったが、新婚時代はよくしていた。だがあの頃は、彼女をリードしなければと思っていた。彼女の右手をつかんで、常に一歩前を歩く。行き先を決めるのは自分だった。彼女の意見を取り入れつつ、下調べで得た知識を動員して決定権を

にぎる。これが男のすべきことだと思っていた。今は、そうした肩肘を張らなくていい。ごく自然に……仲の良い友達感覚で、葉と接することができる。

優しくなったね、と葉が言った。かつての悠里の気負いを思い出したのだろう。悠里は照れ笑いをした。

気のおもむくまま歩いていくと、懐かしい場所に出た。新婚時代、二人でよく通ったカフェの前だ。小高い場所にあるため、横を向くと夜景が綺麗だ。あいにくカフェはなくなっており、今はキャバクラが入っている。壁に光るネオンはピンク色にキラついて、こすれまくって充血した雌性器を思わせた。

「葉。私の体……変わったけど、これからも一緒にいてくれる？」

下半身への刺激を旨としたネオンの下で尋ねると、彼女は恥ずかしそうに頷いた。その仕草は少女のように愛らしい。制服を素で着ていた年齢に戻ったかのようだ。

悠里は彼女の左手をそとつかんだ。両手をつかんで背伸びをし、彼女に顔を近づける。ネオンのせいで、色欲に濡れたように見える唇に、キスを落とした。ペニスをしゃぶっていた時、がつつきを持っていた唇はいま、上品の和菓子と思わせるしっとり感に満ちていた。だが奥には、淫靡な熱がこもっている。

後ろからヒュウつと声が上がった。視界の端に、仕事帰りのサラリーマンが数人見えた。

「あれ、女の子同士じゃん」

「いいねえ、若いねえ。仲良くやれよー」

そんな冷やかしにも、悠里はもう動じなかった。自分は女で、葉は同性のパートナーだ。彼女の前では女として、男の前では牝として生きていく。決心がついた。

その頃、和奏は歩きながら、携帯電話で父親と話をしていた。辺りには誰もいない。家々の庭の、闇の翳りを映した草が、夜風にそよいでいるだけだ。

「ぜんぶパパの言うとおりでっ。遥香ちゃんとセックスして、遥香ちゃんにオモチャを買って、パパ・ママを調教させて……ついに僕、4Pしちゃった」

『それは良かった』

電話向こうから、年配の男の柔らかい声が頷く。

『お前が才能をもっとも開花させられる行為がセックスだ。如何なく発揮できたようで本当に嬉しい。これからも、その武器を充分にふるいなさい』

「ありがとう、パパだいすき！　だから……ね、もっといっぱい、射精できるようにしてほしいな。今は一時間に最高で十回しかいけないんだ。二十回イきたいよ」

『そうだな……検討しておこう。前向きに』

父親の言葉に、和奏はよろしくと言って電話を切る。

覚えの良い調教者と、巨根の言いなりになる従順な奴隷。そして牝堕ちした美人男性。せっかく見つけた素敵な家族だ。限界まで可愛がりたい。

（それにしても、ゆりちゃんはホント素直だったなあ）

妻が犯されていることを知ってなお、股をひらく淫乱ぶり。男の矜持のない姿勢。

彼は牝になるべき人間だったのだと、和奏は改めてそう思った。

170

160

150

140

瀬波 悠里

瀬波 栞

瀬波 遥香

※目や髪の色は父親ゆすり

白浜 和奏

